



第15回(2012年度) 大会プログラム

日時 2012年12月1日(土) / 12月2日(日)

会場 大阪学院大学 2号館

〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

Tel : (06) 6381-8434

大学HP : http://www.osaka-gu.ac.jp/guide/cl_frame/index.html

アクセス : http://www.osaka-gu.ac.jp/campus/cl_frame/index.html

JR 東海道本線「岸辺駅」・阪急京都線「正雀駅」ともに大学まで徒歩5分。

(1) 阪急電車「河原町駅」から「茨木市駅」経由で「正雀駅」まで 41分

(2) JR「京都駅」から「高槻駅」経由で「岸辺駅」まで 32分

(3) JR「大阪駅」から「岸辺駅」まで 12分

(4) JR「新大阪駅」から「岸辺駅」まで 8分

大会スケジュール(要旨)・会場案内

1日(土)

8:30～ 大会受付
9:00～ ワークショップ
10:50～ 開会式
11:00～ 会長就任講演
12:15～ ポスター発表
14:00～ 研究発表
16:30～ 基調講演
18:15～ 懇親会

2日(日)

8:30～ 大会受付
9:00～ 研究発表
11:30～ 会員総会
13:00～ 招待講演
14:50～ 特別シンポジウム
16:50～ 閉会式

大会受付 2号館 1階ロビー(初日 8:30 ～ 大会終了まで)

書籍展示 2号館 地下1階廊下

休憩室 2号館 地下1階ラウンジ

大会本部 2号館 [02-02-02]

昼食場所 (当日配布のランチマップをご覧ください。)

12月1日（土曜日）

ワークショップ（9:00～10:40）

A会場 ワークショップ1 [02-B1-02]

若者ことばに見られる語用論的特徴

司会：尾谷昌則（法政大学）

1. 若年層におけるネオ敬語「ス」の使用動機について 呉 泰均（北海道大学大学院）
2. 若者言葉における略語—渋谷系（ギャル語）を中心に— 黒田一平（京都大学大学院）
3. 「適当」と「最高」がカタカナ表記される動機の違い—関連性理論からの分析—
吉田充良（法政大学大学院）

B会場 ワークショップ2 [02-B1-01]

Hemingway 作品を読み解く—語用論、文体論、認知言語学の接点を求めて—

司会：深田 智（京都工芸繊維大学）

コメンテーター：大沼雅彦（聖トマス大学）

1. 表現と省略の構図—“Indian Camp”における文体と物語のなぞ—
山口治彦（神戸市外国語大学）
2. 文学と言語学の狭間でヘミングウェイを読む—揺れ動く解釈と登場人物の心理—
倉林秀男（杏林大学）
3. 視座と〈見え〉から Hemingway 作品に迫る 深田 智（京都工芸繊維大学）

C会場 ワークショップ3 [02-B1-04]

語用論研究から日本語教育へ、日本語教育から語用論研究へ

司会：名嶋義直（東北大学）

1. 聞き手が示す共感—聞き手の感想が付け加えられた場合— 小山友里江（名古屋大学大学院）
2. 日本語学習者のポライト・ネスストラテジーに関する—考察—
梅木俊輔（東北大学大学院）
3. インドネシア人のコミュニケーション・ストラテジーについての—考察—
—接触場面でのコミュニケーションを円滑に進めるために—
エミ・インダーブリヤンティ（東北大学大学院）

D会場 ワークショップ4 [02-03-01]

コンテキストから見た動詞の意味解釈をめぐる：過程構成の参与要素と過程中核部に

関する日英語の対照研究

司会：龍城正明（同志社大学）

1. 日英語の動作動詞文に関する—考察— 綾野誠紀（三重大学）
2. コンテキストから見た英語の起動的/他動的解釈の—試案— 鷲嶽正道（愛知学院大学）
3. 日本語の能格動詞に関する—考察：過程構成と主題構造の関係から—
藤田 透（同志社大学大学院）

開会式 (10:50~11:00)

[A 会場 02-B1-02]

会長就任講演(11:00~12:10)

[A 会場 02-B1-02]

司会 山本英一 (関西大学)

講演者：林 宅男 (桃山学院大学)

講演題目：“Conceptualization as the sign’s effect: how polite utterances come to be produced”

ポスター発表 (12:15~13:55) [1 階ロビー]

1. Cross-Cultural and Interlanguage Research on the Speech Act of Disagreement Responses
YU, Ming-Chung (National Chengchi University)
2. 恩恵の受領を表す動詞の意味分化—日本語の「もらう」と韓国語の「patta」との対照から
安 薫連 (名古屋大学大学院)・堀江 薫 (名古屋大学)
3. 「他者受益の授受補助動詞『てもらう』文」
関根和枝 (昭和女子大学大学院)
4. ニュース報道での「[VN (動名詞) / N (名詞)] +です」表現について ~「イチロー選手が電撃移籍です」「尖閣諸島で新たな動きです」~
田中伊式 (NHK 放送文化研究所)
5. 韓国語の連体形「kes-kathun」の終止形化と語用論的拡張—日本語の連体形「みたいな」との対比を通じて—
呉 守鎮 (名古屋大学大学院)・堀江 薫 (名古屋大学)
6. レトリックと受身
原 江利 (放送大学 (学部))
7. 連辞型響鳴におけるトークンと生起傾向
伊澤宜仁 (慶應義塾大学大学院)
8. Gender-related variation in the responses to criticisms: A contrastive study of Taiwanese and American speakers
TUAN, Huitsen Jeanne (Shu-te University)
YAO, Hui-mei (National Penghu University)
9. イギリス英語会話と日本語会話の言語 (非言語) 行為に対する印象：母国語話者へのインタビューデータより
藤村ウィルソン香予 (安田女子大学)
10. Reconsidering future tense markers in Indonesian
MIYAKE, Yoshimi (Akita University)
11. Comparing self-face and group/family-face with reference to Korean apologies
HAHN, Jee-Won (Pukyong National University)
12. Understanding Editorial Cartoons via Cognitive Models
SHU-PEI, Hsiao (National Taiwan University)
13. 会話の推意としての‘proximal’—尺度推意を用いたコ系とア系の分析—
平田末季 (北海道大学大学院)
14. 日本語と中国語における「ほめ」表現—目上への「ほめ」行動の比較—
楊 一林 (金沢大学大学院)
15. 合コンにおける「褒め」の分析—ポジティブ・ポライトネスの観点から—
谷 智子 (三重大学)・大塚生子 (大阪大学大学院)
16. 日本語名詞句トートロジー再考：「AはAだ」
山本尚子 (奈良女子大学)

研究発表 (14:00~16:25)

A会場 [02-B1-02] 英語発表

- ① 14:00-14:35 ② 14:35-15:10 ③ 15:15-15:50 ④ 15:50-16:25

Chair: KOYAMA, Tetsuharu (Kyoto Notre Dame University)

1. A Study of Impoliteness in *Kang Xi Lai Le* from the Perspective of Adaptation Theory
HUANG, Mei Ling (Providence University)
2. A Presupposition Study on News Anchors Language: A Case Study of Next TV
WANG, Cong Wei (Providence University)

Chair: HASHIUCHI, Takeshi (St. Andrew's University)

3. A Comparative Study of the Corpora for General and Specific Purposes for a Pragmatic Study
SUZUKI, Toshihiko (Waseda University)
4. Characteristics of descriptive texts produced by intermediate and upper-intermediate learners of English
YAMADA, Yoko (Kansai Gaidai University)

B会場 [02-B1-01] 日本語発表

- ① 14:00-14:35 ② 14:35-15:10 ③ 15:15-15:50 ④ 15:50-16:25

司会：北爪佐知子 (近畿大学)

1. 日本語の促音便形複合動詞の構造と意味形成
史 春花 (神戸大学大学院)
2. 現代英語における話し言葉と書き言葉の文法的差異に関する語彙的な研究—主語省略と知覚動詞
柴田かよ子 (京都府立大学大学院)

司会：谷口一美 (京都大学)

3. マスメディアの科学ディスコースに現れる数値表現の認識—数値間の相違性に依拠した論証に着目して—
出口由美 (関西大学大学院)
4. アメリカ英語における定形節補部を伴う連結詞的知覚動詞の使用の発達について： The Corpus of Historical American English の調査に基づいて
中村文紀 (慶應義塾大学)

C会場 [02-B1-04] 日本語発表

- ① 14:00-14:35 ② 14:35-15:10 ③ 15:15-15:50 ④ 15:50-16:25

司会：岡本雅史 (立命館大学)

1. 多重質問の sarcasm と修辞性
後藤リサ (奈良女子大学博士研究員／関西外国語大学非常勤講師)
2. 日英語話者の事態把握と「(反語) 命令文」の認知語用論研究
佐藤晃紀 (札幌大学大学院)

司会：森山由紀子 (同志社女子大学)

3. 視点、文脈と指標性—英語指示詞における聞き手への視点移動の現象を中心に—
澤田 淳 (青山学院大学)
4. 「左と右の周辺部 (Left and Right Peripheries)」と「主観性・間主観性」との関係は？
—歴史語用論における考察—
小野寺典子 (青山学院大学)

D 会場 [02-03-01] 日本語発表

① 14:00-14:35 ② 14:35-15:10 ③ 15:15-15:50 ④ 15:50-16:25

司会：田中廣明（京都工芸繊維大学）

1. 直接的認識表現やハリの生成過程：日本語の「含過程構造」のコード化
氏家洋子（ノートルダム清心大学）
 2. on the contrary の意味と対立関係
黒川尚彦（大阪工業大学）
- 司会：梅原大輔（甲南女子大学）
3. 「XのほうがもっとPだよ」中の「もっと」の語用論的機能
森 貞（福井工業高等専門学校）
 4. 談話標識 I mean の意味体系とその使用原理
小林 隆（金沢大学大学院）

E 会場 [02-03-02] 日本語発表

① 14:00-14:35 ② 14:35-15:10 ③ 15:15-15:50 ④ 15:50-16:25

司会：井上逸兵（慶應義塾大学）

1. 中国語の指示詞による総称表現について—英語との比較を兼ねて
劉 羈（京都大学大学院／日本学術振興会）
 2. “be lined with” について
黒宮公彦（大阪学院大学）
- 司会：須賀あゆみ（奈良女子大学）
3. 日本語の一人称語の人称転換と消費者の自己実現
西田光一（下関市立大学）

基調講演(16:30~18:00) [A 会場 02-B1-02]

司会 加藤重広（北海道大学）

講演者：Professor Charles L. Briggs（University of California, Berkeley）

講演題目：“The Pragmatics of Discourse about Global Circulation”

懇親会（18：15～20：00）

会場：17号館 1階 職員食堂

会費：3,000円

（交流と議論の場です。お一人でもご遠慮なく。）



12月2日（日曜日）

研究発表（9:00～11:25）

A 会場 [02-B1-02] 日本語発表／英語発表

① 9:00-9:35 ② 9:35-10:10 ③ 10:15-10:50 ④ 10:50-11:25

Chair: KUBO, Susumu (Matsuyama University)

1. 日本語名詞句の INDEFINITENESS のかたちについて—素名詞句と叙述名詞句
中井延美（明海大学）
2. Concession in the academic context: power and expertise factors
LYDA, Andrzej (University of Silesia)

Chair: NISHIYAMA, Yuji (Meikai University)
3. Subjunctive wh-questions (in German)
MÜLLER, Sonja (Universität Bielefeld/Georg-August-Universität Göttingen)
4. The meaning and use of utterance situation-based comparison in Japanese
SAWADA, Osamu (Mie University)

B 会場 [02-B1-01] 英語発表（前半）＆日本語発表（後半）

① 9:00-9:35 ② 9:35-10:10 ③ 10:15-10:50 ④ 10:50-11:25

Chair: SCHOURUP, Lawrence (Osaka Prefecture University)

1. A quantitative analysis of noncanonical *though* clauses in naturally occurring discourse
MIZUNO, Yuko (Asahikawa National College of Technology)
2. The Discourse Marker "So" in American Media: Teleology Marking in Interaction
O'NEAL, George (Niigata University)

司会：福田一雄（新潟大学）
3. John looks happy./I saw John happy. 視覚に関する2つの知覚動詞構文における事態把握のパターン
徳山聖美（神戸市外国語大学大学院）
4. 認知叙述類型論の試み：英語の中間構文・他動詞-able 構文と日本語の能動的・受動的・可能構文の事例
對馬康博（札幌大学）

C 会場 [02-B1-04] 日本語発表

① 9:00-9:35 ② 9:35-10:10 ③ 10:15-10:50 ④ 10:50-11:25

司会：鍋島弘治朗（関西大学）

1. 言葉遊びから生じる発話のカー洒落が駄洒落となる場合の文法的及び語用論的条件—
小松原哲太（京都大学大学院／日本学術振興会特別研究員）
2. 英語広告表現におけるメタ言語否定・意味反転・共有知識からの逸脱に関するズレの階層性
有光奈美（東洋大学)

司会：山口治彦（神戸市外国語大学）
3. クロージング場面におけるリスナーシップ：日本語会話における笑いとの関係
難波彩子（岡山大学）
4. 主語名詞句が左方転位化されている日英語の左方転位構文
海竇康臣（立命館大学客員研究員）

D 会場 [02-03-01] 日本語発表

① 9:00-9:35 ② 9:35-10:10 ③ 10:15-10:50 ④ 10:50-11:25

司会：金水 敏（大阪大学）

1. Semantic Extension of Verb SHIMAU-From a Grammaticalization Point of View-
張 又華（京都大学）
2. 文末が名詞で終わる報告・引用表現
大西美穂（名古屋大学）

司会：神田靖子（大阪学院大学）

3. 「ナイカ」と「ナイノカ」—日本語否定疑問文におけるノダの語用論的機能
亀山里津子（大阪大学大学院）
4. 談話における「よね」の機能—対話的用法と共話的用法に注目して
大久保加奈子（京都府立大学大学院）

E 会場 [02-03-02] 日本語発表

① 9:00-9:35 ② 9:35-10:10 ③ 10:15-10:50 ④ 10:50-11:25

司会：余 維（関西外国語大学）

1. “你说” “我说”
汪 宇（東京福祉大学）
2. 不満表明の日中対照研究：性差を中心に
莫 曉雪（名古屋大学大学院）

司会：名嶋義直（東北大学）

3. 「褒め」に対する日本人英語学習者の応答—海外語学研修の前と後の会話を資料として—
山本綾（豊橋技術科学大学）
4. ロシア人日本語学習者が依頼に対する「断り」のストラテジーを選択する要因
ブラーエヴァ・マリヤ（名古屋大学）

総会 (11:30~12:00) [A 会場 02-B1-02]

司会：山本英一（事務局長）

- | | |
|------------|----------------|
| 1. 会長挨拶 | 林 宅男（桃山学院大学） |
| 2. 会計報告 | 五十嵐海理（龍谷大学） |
| 3. 編集委員会報告 | 山口治彦（神戸市外国語大学） |
| 4. 事務局長報告 | 山本英一（事務局長） |

招待講演 (13:00~14:40) [A 会場 02-B1-02]

司会：東森 勲（龍谷大学）

講演者：Professor Michael Rundell (Editor-in-Chief, Macmillan dictionaries)

講演題目：“Corpora, dictionaries and pragmatics: challenges and opportunities in the age of e-lexicography”

シンポジウム (14:50~16:50) [A会場 02-B1-02]

テーマ：“Corpus Linguistics and Pragmatics”

講師：松本裕治（奈良先端技術大学院大学）“Corpus-driven Contextual Processing”

講師：石川慎一郎（神戸大学）“Interface of corpus linguistics and pragmatics”

指定討論者：堀江 薫（名古屋大学）

指定討論者：Professor Michael Rundell（Editor-in-Chief, Macmillan dictionaries）

司会：久保 進（松山大学）

閉会式 (16:50~17:00) [A会場 02-B1-02]

閉会の挨拶

東森 勲（龍谷大学）

講演・発表要旨

12月1日(土曜日)

ワークショップ (9:00~10:40)

A会場 ワークショップ1 [02-B1-02]

若者ことばに見られる語用論的特徴

司会:尾谷昌則(法政大学)

本ワークショップでは、若者に多く見られる日本語表現の中から、1)略語、2)カタカナ語、3)丁寧表現~ッスの3点を取り上げ、その事例研究を紹介する。若者言葉は、中高年世代から批判を受けることも多いが、そこには若者独特の語用論的配慮が見られることも多い。若者が新しい言葉を生み出すのは、単に無知だからというわけではなく、既存の表現だけでは表しきれない「何か」を表すためであると考えられる。例えば、近年ではネガティブ・ポライトネス志向がポジティブ・ポライトネス志向へと変化しつつあるという指摘もあり、若者特有の待遇表現にもそれが反映されている。また、従来とは異なる形態や表記の使用に、特殊な意味や意図が反映されている場合もある。本ワークショップでは、このような事例について語用論的な視点から考え、議論を深める場を提供したい。

参考文献: (1)堀素子・津田早苗・村田泰美・村田和代・関山健治. 2000. 『現代若者ことばの潮流』。(2) Brown, Penelope and Stephen Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. CUP.

1. 若年層におけるネオ敬語「ス」の使用動機について

呉 泰均(北海道大学大学院)

本論は、具体的な場面での語用論的機能上、常体と敬体の中間話体として位置づけられる呉(2012)のネオ敬語(neo-politeness style)「ス」を取り上げ、これまで指摘されることのなかった「ス」の使用動機について、「言語運用能力の社会化」(wording)の観点から、どのような要因が発動したと説明できるのか、その可能性を提案するものである。具体的には、ネオ敬語「ス」を能動的かつ積極的に活用する大人に対して、言語形式を細かく調整できる社会運用能力の低い若年層においては、「(1)丁寧語形式を細かく調整する能力が低い(2)丁寧語形式を細かく調整する必要がない(3)品位が高くて大人ぶった感じがする言い方を避けたいという‘負の動機’の発動」といった受動的で消極的な使用理由・動機で「ス」を使用している、ということを論じる。

参考文献: (1)呉泰均. 2012. 「ネオ敬語「ス」の語用論的機能」『日本言語学会第144大会予稿集』. 300-305. (2)加藤重広. 2002. 「言語使用者における動機のあり方について」『富山大学人文学部紀要』36. 43-49. (3) Jacob L. May. (1993) *Pragmatics: An Introduction*. Blackwell.

2. 若者言葉における略語-渋谷語(ギャル語)を中心に-

黒田一平(京都大学大学院)

「渋谷語」という若者言葉の一種における略語の形式的特徴として、KY語のような頭字語や、既存の語彙を利用する表現が多く見られる。これらの表現には、単なる経済性だけでなく、語感や既存の語彙との関連による面白さという効果を感じられる。また、これらは元表現の復元のコストが高いため不明瞭な表現となり、直接言いづらいことを婉曲化するために用いられる場合もある。表現の不明瞭さは、その表現が通じる集団内では共感を高め、集団の外に対しては排他的な印象を与える。そして、その集団の一員であることを示す「キャラづけ」という使用動機も考えられる。先行研究では、これらの特徴は断片的にしか扱われておらず、具体的な発話場面もあまり考慮されてはいなかった。本発表では、このような使用動機や表現効果を略語の語用論的機能としてとらえ、省略形式と各機能との関係や、機能間の相互作用を、個々の使用例から分析する。

主要参考文献：(1) 北原保雄. 2008. 『KY 式日本語 ―ローマ字略語がなぜ流行するのか』. 東京: 大修館書店. (2) 渋谷語制作委員会. 2008. 『渋谷語辞典 2008』. 東京: TWJ. (3) 村田和代. 2005. 「ボライトネスから見る若者ことばの機能―龍谷大学キャンパス語の分析を通して―」『龍谷大学国際センター研究年報』14: 25-37.

3. 「適当」と「最高」がカタカナ表記される動機の違い―関連性理論からの分析―

吉田充良 (法政大学大学院)

近年、若者を中心に「適当」を「テキトー」、「最高」を「サイコー」と表記する例が目立つようになってきたが、表記法の選択は単なる偶然ではなく、何かしらの意味を持つことがよく知られている(佐竹 1980、柴田 1998、堀尾・則松 2006、臼木 2008)。そこで本発表では、「適当／テキトー」と「最高／サイコー」とに焦点を当て、通常漢字表記されるものがカタカナ表記されることで生じる意味の違いについて関連性理論の観点から説明を試みる。「適当／テキトー」については「語の多義性」から書き手がカタカナ表記することによって、読み手における「解釈コストの削減」が起きると考えられ、そのことがカタカナ表記の積極的な動機であることを指摘する。「最高／サイコー」については「主観性の明示」が書き手にカタカナ表記をさせ、一方で読み手に取ってはそれが「解釈コストの省力化」に結びつくことを指摘する。

参考文献：(1) 佐竹秀雄. 1980. 「若者雑誌のことば―新・言文一致体―」. 『言語生活』. 343.46-52. (2) 吉村あき子. 2011. 「関連性理論―発話解釈モデルと認知科学的志向性―」. 『日本語学』. 30.14.106-114.

B会場 ワークショップ2 [02-B1-01]

Hemingway 作品を読み解く―語用論、文体論、認知言語学の接点を求めて―

司会：深田 智 (京都工芸繊維大学)

コメンテーター：大沼雅彦 (聖トマス大学)

本ワークショップでは、Ernest Hemingway の短編作品を1つ (ないしは2つ) 取り上げ、テキストだけを手掛かりに Hemingway の文体に迫る。分析を行うのは、語用論、文体論、認知言語学の枠組みで研究を重ねてきている3人の発表者である。拠って立つ理論や研究背景の異なる発表者がそれぞれの立場から Hemingway 作品を分析することで、一般に「ハードボイルド」と形容される Hemingway の文体の詳細を明らかにしていくことができればと考えている。3人の発表者は、必ず“Indian Camp”を取り上げ、この作品の文体を“Hills like White Elephants”ないしは“Cat in the Rain”と比較しながら検討を加える。いずれも Hemingway の短編を代表する作品であり、テキストだけでどこまで読み解けるかが課題である。3人の発表後には、意味論・語用論を中心に文体にも注目して研究を行ってきている指定討論者にも加わっていただき、議論を膨らませていく。発表内容についてはもとより、テキストの分析方法それ自体についても議論していく場としたい。

1. 表現と省略の構図―“Indian Camp”における文体と物語のなぞ―

山口治彦 (神戸市外国語大学)

Hemingway の文体は、「何を書くか」以上に「何を書かないか」に配慮した、非常に簡潔なスタイルであると言われる。本発表は、まず、(一見したところ) 厳然たる事実のみしか提示されない寡黙な文体の一面を、指示表現に着目しながら明らかにする。より具体的には、語りの地の文における「形容詞＋名詞」の構造を取り上げ、修飾語句の有無がどのような表現効果を生んでいるのか示したい。

次に、この作品に関して文学研究でよく取り上げられるふたつの問題―少年ニックに対するイニシエーションの成否、および夫の自害のなぞ―について、文体の特徴と物語の構造に関連づけて私見を述べる。このふたつのなぞに対し、物語構成の論理と読者への情報提示の切り詰め方に着目し、作品

解釈のコンテクストを広げずに一定の回答を提示したい。寡黙な文体と作品の読みとが関連している様をとらえられれば幸いである。

参考文献：(1) Horn, Laurence R. 1984. Toward a new taxonomy for pragmatic inference: Q-based and R-based implicature. *GURT* 1984, 11-42. (2) 山口治彦 2008. 「汗と涙のシンデレラ：サクセスストーリーの語り方」『言語』 37:1, 66-71.

2. 文学と言語学の狭間でヘミングウェイを読む―揺れ動く解釈と登場人物の心理―

倉林秀男（杏林大学）

文体論の観点から Hemingway 作品の解釈に迫る。Widdowson (1975)の主張に従って、文体論を言語学と文学批評との媒介と位置づけ、作品解釈と文体の関連性について論じていく。ハードボイルドと称される Hemingway の文体は、比較的短い文で成り立ち、心理描写を行うことなく物語を展開させる。しかし、テキストの表現一つ一つに留意しながら読み進めて行くと、登場人物の心の機微の描写の存在に気づく。本発表では“Indian Camp”を取り上げ、知覚動詞に注目し、作品を読み進めながら、登場人物の心理状態を浮き上がらせる。さらに適宜“Hills Like White Elephants”と比較しながら、文学研究で通説となっているヘミングウェイのハードボイルドスタイルというものに対して問題提起をし、新たな読みの可能性を提示する。そして、文学研究で行われてきた作品解釈の問題について取り上げ、文体分析をしながら一定の解釈を試みる。

参考文献：Widdowson, Henry G. 1975. *Stylistics and the Teaching of Literature*. London: Longman.

3. 視座と〈見え〉から Hemingway 作品に迫る

深田 智（京都工芸繊維大学）

Hemingway の文体を認知言語学・認知意味論の観点から分析する。認知言語学では、言語表現に反映される主体性や主観性、間主観性が重要な研究課題の1つとなっている。特に、Langacker (2008) は、主体性の根源が具体的な身体経験に根差す認知処理に認められること、また、この心的シミュレーションを介して文学作品の理解が可能となっていることを主張しているという点で注目に値する。これが正しければ、主体的な言語表現やその関連表現に注目して文学作品を分析していくことで、登場人物や語り手の視座、登場人物の〈見え〉（ないしは知覚）や心情などを読み解くことができると思われる。本発表では、“Indian Camp”を中心に、“Hills like White Elephants”ないしは“Cat in the Rain”の文体とも比較しながら、直示的な意味を表す *come* や *this*, *ahead* 等の空間関係表現や連結的知覚構文などに注目し、これらが誰の視座や知覚を反映した言語表現であるかを検討しながら、作品を読み解いていく。

参考文献：Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

C会場 ワークショップ3 [02-B1-04]

語用論研究から日本語教育へ，日本語教育から語用論研究へ

代表者 名嶋義直（東北大学）

まず第一登壇者が，日本語母語話者会話に見られる「共感」的発話について言語形式や意味に着目した語用論的考察を行う。続いて第二登壇者が，日本語学習者と母語話者のそれぞれが作成した会話を事例にポライトネス・ストラテジーの観点から比較した結果について分析し，語用論的アプローチがコミュニケーション教育に対し有効となる点について述べる。最後に第三登壇者が，インドネシア語話者（INS）が日本語母語話者（JNS）との会話中に会話を円滑に進めるために使用しているコミュニケーション・ストラテジー（CS）について考察を行い，日本語学習の初期の段階からコミュニケーション・ストラテジー教育の展開を考えるべきであるという具体的な提案を行う。その後，フロア

とともに批判的検討を行い、語用論研究の有益性を確認するとともに、日本語教育研究から語用論研究への提言を模索する。

1. 聞き手が示す共感 - 聞き手の感想が付け加えられた場合 小山友里江 (名古屋大学大学院)

本発表は、聞き手の感想が付加された「共感」的発話について、意味・文末形式に着目した語用論的考察を行うことを目的とする。会話データを分析した結果、大きく2つの性質がみられた。1つは、話し手の発話を受けて「聞き手の発想」が感想として述べられているもの、2つ目は、「話し手の発話の後押し」が感想として述べられているものである。また、2つに共通してみられた特徴は、話し手のアイデアを活かしながら感想が付加されていたことである。更に、2つの特徴を、話し手と聞き手に共通の経験があるかという観点から考察した。「聞き手の発想」が感想として述べられている発話は、共通の経験がある場合は驚きを表明したり、話し手の能力や共通の友人を称賛していた。無い場合は相手の状況に理解を示したり、相手を羨ましいと思う気持ち表明していることが分かった。

参考文献：(1) 田中妙子. 2001 「会話における共感表明発話」『日本語と日本語教育』30 51-60. 慶応義塾大学 日本語・日本文化教育センター. (2) 植野貴志子. 2012. 「聞き手行動の社会言語学的考察 - 語りに対する聞き手の働きかけ -」『日本女子大学紀要.文学部』61 57-68. 日本女子大学.

2. 日本語学習者のポライトネス・ストラテジーに関する一考察 梅木俊輔 (東北大学大学院)

学習者の会話に見られる発話や行動について、相手に対するネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの観点から母語話者と比較したところ、全体的に、マクロな知識(個々の言い方を規定する「ゴールに向けた展開のさせ方」)が不足気味であることがわかった。具体的には、(1)「どうしたの? /何かあったの?」ではなく、「どうして〜?」と尋ねる、(2)話題を含め、会話状況での共通認識を構築するやりとりが行われない、(3)相手に対する話者の態度(「心配している」等)がターン内で明示される、(4)相手の「うん、ちょっと」という返答に対し、個人の利害関係よらず踏み込む、などの点での相違が顕著である。相手のネガティブ・フェイスにかかわる態度等、その解釈が相手に委ねられるコミュニケーションは日常的に行われる。誤解の解決や回避に向け、マクロな情報は有効な視点を提供することも多く、利用可能な形として充実させていく必要がある。

参考文献：(1) 許明子. 2011. 「聞き手のパーソナル・テリトリーに関わる談話分析—日本人・韓国人・中国人母語話者の調査を通して—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』26, 筑波大学留学生センター. 1-17. (2) Hayashi, Takuo. 1996. "Politeness in conflict management: A conversation analysis of dispreferred message from a cognitive perspective" *Journal of Pragmatics* 25. 227-255. (3) 宇佐美まゆみ. 2006 「談話研究におけるローカル分析とグローバル分析の意義」『言語情報学研究報告 13 自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』. 宇佐美まゆみ(編) 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」. 229-243.

3. インドネシア人のコミュニケーション・ストラテジーについての一考察 —接触場面でのコミュニケーションを円滑に進めるために—

エミ・インダープリヤンティ (東北大学大学院)

本発表では、インドネシア語話者(INS)が日本語母語話者(JNS)との会話中に会話を円滑に進めるために使用しているコミュニケーション・ストラテジー(CS)を明らかにすることを目的とする。4組のINSとJNSの初対面接触場面の自由会話計80分及び会話後のフォローアップ・インタビュー(FUI)のデータを二つの観点から分析した。INSの日本語能力は中級者2名と上級者2名である。その結果、会話中にコミュニケーション問題が生じないように言葉遣いや態度を工夫するCSと、相手との良好的な関係を構築するために行なうCSとが観察された。INSは①あいづち、②談話マーカ、③尊敬語、④詫び表現の4つを使用してCSを行使していた。以上の結果が

ら、日本語能力が不十分でも CS を効果的に使用することによって、会話をうまく進行させることができ、日本語学習の初期の段階から CS 教育の展開を考えるべきであるといえる。

参考文献：(1) 陳石順. 2011. 「異文化話者間の会話で見られる心的距離短縮機能—韓国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーを中心に—」『学習院大学大学院日本語日本文学』7. 106-79 (i-xxvii). (2) 永田良太. 2004. 「会話におけるあいづちの機能：発話途中に打たれるあいづちに注目して」『日本語教育』120. 53-62

D会場 ワークショップ4 [02-03-01]

コンテキストから見た動詞の意味解釈をめぐる：過程構成の参与要素と過程中核部に関する日英語の対照研究
司会：龍城正明（同志社大学）

1. 日英語の動作動詞文に関する一考察

綾野誠紀（三重大学）

Halliday (1967-68)は、open 等のいわゆる自他交替動詞及び march 等の使役が関わる動詞の特性、さらに、共起する主語・目的語等の文内要素の特性に関する分析を提案した。本発表では、Halliday の分析も参考にしつつ、日英語における動作事態(motion event)を表す動詞及び他の文内要素の特性について考察する。

(1)で示す日英語の差異は、当該動詞の自他交替(正確には非対格・非能格交替)の有無に起因することを、場所句の二次述語分析(竹沢 2000)を基に、Ayano (2005)において論じた。

(1) a. John walked in/to the park.

b. 太郎が公園で/*に/*へ歩いた。

(1a)の walk は、到達点を表す場所句と共起する場合、非対格であるが、単なる場所句と共起する場合には非能格である。一方、日本語には非能格の「歩く」しか存在しないので、到達点を表す場所句とは共起不可能である。

さらに、(2)は、英語の walk が使役化することを示している。

(2) John walked his dog in the neighborhood.

本発表では、以上の動作動詞の交替現象及び共起する文内要素の特性について検討する。

参考文献：(1) Ayano, S. 2005. "Talmy's Lexical-Semantic Typology and Three Types of Directional PPs in Japanese." BLS 31. (2) Halliday, M. A. K. 1967-68. "Notes on Transitivity and Theme in English." Journal of Linguistics. (3) 竹沢幸一. 2000. 「空間表現の統語論：項と述部の対立に基づくアプローチ」. 『空間表現と文法』.

2. コンテキストから見た英語の起動的/他動的解釈の一試案

鷲嶽正道（愛知学院大学）

選択体系機能言語学(Systemic Functional Linguistics)において、経験の因果関係に注目した分析法である起動的(ergative)分析は、行為と対象に注目した他動的(transitive)分析と相補的な関係にある。Halliday (1967-8)では、英語で行為を具現する節に3つのタイプを同定し、行為が行為者以外の事物に影響する effective、行為が行為者以外に及ばない descriptive、両者の特徴を統合した nuclear のいずれが無標となるかは、動詞のタイプによるとした。

本発表では、これら3タイプの節解釈をテキストの際立ちに関わる前景化(foregrounding)と背景化(backgrounding)の観点から捉える。まずは、テキストを起動的/他動的分析し、類縁する節タイプとの比較から解釈の曖昧性を指摘する。次に、その節を特定のコンテキストで背景化された節タイプと比較し、解釈の妥当性を検討する。以上により、起動的/他動的分析の解釈にはコンテキストの理解が必要であることを議論する。

参考文献：(1) Halliday, M. A. K. 1967-8. 'Notes on transitivity and theme in English, Part 1-3', *Journal of Linguistics*, 3-4. (2) Halliday, M.A.K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar* 2nd ed. London: Arnold. (山口登・笥壽雄訳. 2001. 『機能文法概説—ハリデー理論への誘い—』東京. くろしお出版)

3. 日本語の能格動詞に関する一考察：過程構成と主題構造の関係から

藤田 透 (同志社大学大学院)

本発表では、選択体系機能言語学 (SFL) の枠組みによって、日本語と英語の動詞を用いた節を意味化して分析し、実際のテキストの中でどのように機能するかを、コンテキストとの関係から議論する。特に、日英語の双方に存在するとされている、能格動詞と呼ばれる種の動詞が表す過程 (process) を対照的に分析する。Halliday (1967-8) は、英語の能格動詞を他の参与要素と統合して過程構成 (transitivity) の枠組みで体系的に分析しているが、日本語の動詞体系は自他交替等を含めて、より複雑な様相を呈していると言える (影山, 1996)。本論では、日本語が必ずしも起動者や行為者を明示しないという特性を捉えて、「扉が開く」や「扉を開く」、「扉は開く」などの表現の機能的差異を分析する。これらが、語順による格表示をしない日本語において、どのようなコンテキストの差を具現しているのかを、過程構成と主題構造の関係から論じる。

参考文献：(1) Halliday, M. A. K. 1967-8. 'Notes on transitivity and theme in English, Part 1-3', *Journal of Linguistics*, 3-4. (2) Halliday, M. A. K., & Matthiessen, C. M. I. M. 2004. *An Introduction to Functional Grammar* (3rd ed.). London: Arnold. (3) 影山太郎. 1996. 『動詞意味論：言語と認知の接点』. 東京：くろしお出版.

会長就任講演(11:00~12:10) [A会場 02-B1-02]

Conceptualization as the sign's effect: how polite utterances come to be produced

Professor Takuo Hayashi

Momoyamagakuin University (St. Andrew's University)

Haberland and Mey (1977:5), in formulating what linguistic pragmatics is, state that "the pragmatic question par excellence is [...] not: What does an utterance mean? but: How did this utterance come to be produced?". The present talk will pursue this question with focus on the effect of signs.

One of the important notions underlying current pragmatic theories is that meaning of language resides in its effect. We can trace back this notion to Charles Peirce (1902)'s proposal of the triadic sign relation of sign, interpretant and object, where interpretant is defined as the sign's effect on the mind. Charles Morris (1946) developed Peirce's account of the interpretant by incorporating George Mead's social behaviorist notion that meaning involves a stimulus-response type process. This view of semiosis is also grounded in Grice's formulation of non-natural meaning (meaning_{NN}) and Sperber and Wilson (2002)'s account of inferential meaning. The notion of effect is not confined to ideational or propositional aspects of meaning; it applies as well to the performative aspect of language (e.g. Austin (1962)'s 'illocutionary acts' and 'felicity conditions'), and even to the constitutive aspect of language (e.g. Fairclough (1989)'s notion of 'synthetic personalization').

As these and other studies have shown, linguistic signs convey effects of multiple kinds that are often interrelated (e.g. ideational, affective (or interpersonal), textual, sociocultural, intentional, and ideological.) In this talk I will focus on effects of the affective kind. My primary purpose is to give an account of how polite utterances come to be produced, with focus on the manipulation of forms, which corresponds to the second phase of Mead's human action. For this, I will present an analytic model of politeness which explicates the mechanism of how politeness effects are created. The basis of the model is the premise that linguistic meaning is essentially constructed by conceptualization which is motivated by the speaker's pragmatic goal. I propose that polite expressions involve conceptualization of reality, which is motivated by the speaker's reflective perceiving of other person's 'face' for self-interest. The primary component of conceptualization is what is called 'construal' or "our manifest ability to conceive and portray the

same situation in alternate ways" (Langacker, 2008: 43). I argue that politeness effects of both negative and positive kinds can be defined as a function of manipulative conceptualization via construing of conceptual content. I will demonstrate, using English and Japanese examples, that politeness effects can be generated from several construal operations such as specifying, focusing, giving prominence, and taking a different perspective, and briefly touch on how other related effects may subsequently be generated.

References

- Grice, H.P. (1968). Utterer's meaning, sentence meaning and word meaning. *Foundations of Language* 4: 225-242.
- Haberland, H. and J. L. Mey (1977). Editorial: Pragmatics and linguistics. *Journal of Pragmatics* 1:1, 1-16.
- Langacker, R.W. (2008). *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Morris W. C. (1946). *Signs, Language and Behavior*. New York: Prentice-Hall.

ポスター発表 (12:15~13:55) [1階ロビー]

1. Cross-Cultural and Interlanguage Research on the Speech Act of Disagreement Responses

YU, Ming-chung (National Chengchi University)

This paper investigated the interlanguage behavior of adult Chinese learners of American English, focusing on the ways in which they performed the speech act of 'disagreement responses' in a second language (L2). The results showed that the disagreement responses for Chinese speakers were more likely to be embedded with concessions, compromises, and/or even change of activity, while those for Americans were more likely to be embedded with explicit communication codes and/or statement of regret. In addition, contrary to what seems to be suggested in scholarly literature regarding L2 learners in naturalistic settings, this tendency was also obviously shown in the L2 of the Chinese ESL speakers. That is, the performance of these learners could be seen to reflect L1 communicative styles and transfer L1 sociocultural strategies in L2 behavior. The findings had practical implications for L2 teaching and learning.

2. 恩恵の受領を表す動詞の意味分化—日本語の「もらう」と韓国語の「patta」との対照から—

安 薫連 (名古屋大学(院))・堀江 薫 (名古屋大学)

日本語の授受表現の「～テモラウ」とその謙譲形「～テイタダク」については、受益性がない事象に使われるという指摘(熊井 2002a, 上原 2011)があり、文法的意味に変化が起きていることが示唆されている。本研究は、補助動詞「～テモラウ」と本動詞「モラウ」との間で語用論的意味の分化が見られる現象を、「～テモラウ」「モラウ」と対応する韓国語の「連用形 + patta」「patta」との対照を通じて考察する。具体的には、「動詞連用形 + (補助) 動詞」という補助動詞用法が日本語では無標、韓国語では有標である。一方、「漢語動名詞語幹 + 動詞」という語彙的な動詞に近い用法が韓国語では無標、日本語では有標であるが、日本語においても「漢語動名詞語幹 + 動詞」形が無標になる場合がある。その場合、「動詞連用形 + (補助) 動詞」が表す「相手からの受益」とは異なる「相手の行為からの受益よりも自分の行動に焦点を置く」という新しい機能を獲得すると考える。

参考文献: (1) 上原由美子, 「受益性のない事象における「ていただく」について—「～に V してもらう」構文の機能的分析から—」『70 年代生成文法再認識—日本語研究の地平—』開拓社。(2) Kuteva, Tania. 2004. *Auxiliation: An Enquiry into the Nature of Grammaticalization*. Oxford: Oxford University Press.

3. 他者受益の授受補助動詞『てもらう』文

関根和枝 (昭和女子大学大学院)

授受補助動詞「てもらう」文は、話者「私」自身のプラスの受益を表す。しかし、他者受益についても「田中さんに喜んでもらう」と言う。先行研究ではこれをポライトネスの観点で話者の行為謙遜だと説明している。本発表では、表面上他者受益を表しても実は話者のプラスの受益でもある事を、話し言葉と書き言葉の用例から示す。そして他者受益に「てもらう」を使うのは、事態を自己中心的に把握する日本語話者が、自己の視座を他者に投入し他者の体験を共有共感することで、他者の受益を味わうからであるという事を明らかにする。

参考文献：(1) 池上義彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚〈ことばの意味〉のしくみ』NHK出版協会 (2) 資料：(a)現代日本語研究会 (1999/2002) 『女性のことば・職場編』/『男性のことば・職場編』 (b)朝日新聞 2011年3月12日～4月20日

4. ニュース報道での「[VN (動名詞) / N (名詞)] +です」表現について ～「イチロー選手が電撃移籍です」「尖閣諸島で新たな動きです」～

田中伊式 (NHK 放送文化研究所)

ニュース報道番組の冒頭などで、最近、「イチロー選手が電撃移籍です」「尖閣諸島で新たな動きです」などのように、「VN (動名詞) またはN (名詞)」に、「です」を加え、文を締めくくる表現が、しばしば使われるようになってきている。この表現には、新たな事実を、強いインパクトをとともない提示することで、聞き手の関心を引きつけようとするねらいがあると思われるが、本発表では、この文が、「中立叙述」(文全体がまるごと焦点)の名詞述語文であることに注目し、この表現がもたらすインパクトの仕組みについて明らかにする。「中立叙述」は、動詞述語文や形容詞述語文でよく見られる形だが、ここでは名詞述語文の中で機能しており、それが驚きや感慨を示す表現へとつながっている。また同様の表現が、私たちの日常の発話の中にも見られることを、先行研究をもとに示し、仕組みを探る手がかりとする。

参考文献：(1) 新屋映子 1994「意味構造から見た平叙文分類の試み」『東京外国語大学日本語学科年報』15 (2) 砂川有里子 2005『文法と談話の接点』くろしお出版 (3) 鈴木智美 2010「ニュース報道における「{動名詞(VN) / 名詞(N)} +です」文について」『東京外国語大学留学生日本語センター論集』36

5. 韓国語の連体形「kes-kathun」の終止形化と語用論的拡張 ―日本語の連体形「みたいな」との対比を通じて―

呉 守鎮 (名古屋大学大学院)・堀江 薫 (名古屋大学)

本研究では、近年韓国のインターネット(特にブログ)において観察されるようになった韓国語の連体形「kes-kathun」の終止形化と、それに伴う語用論的機能拡張を果たすようになった現象を、日本語の「みたいな」(Fujii 2006)との対比を通じて、個々の形式に固有な特徴を明らかにする。「連体形」と「終止形」の区別が厳格である韓国語において、「連体形」から「終止形」への転換という文法体系の境界のゆれが見られることは注目に値する。

韓国語「kes-kathun」の終止形用法は、本来の連体形用法および終止形「kes-kathta」との「推量」「婉曲」という文法的意味の連続性、またインターネットのブログを中心とした書き言葉というジャンルの限定が見られる。その反面、日本語「みたいな」の終止形用法は、表面的に「kes-kathun」と同様の振る舞いをするが、話し言葉で用いられ、引用形式への機能拡張をしていた。即ち、両言語は「連体形の終止形化」という共通性を見せつつも、語用論的な意味拡張の程度の大小という対比が観察された。

参考文献：(1) Fujii, Seiko. 2006. "Quoted Thought and Speech Using the Mitai-na 'be-like'." In: Suzuki, Satoko (ed.), *Emotive Communication in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins, 53-95.

6. レトリックと受身

原 江利 (放送大学(学部))

本発表は、話し手がなぜ受身で話すのかという疑問に、コミュニケーションという観点から説明しようとするものである。従来の受身の研究は、文法構造や文脈との関係、話し手の視点など多岐にわたる。例えば「選ばれた」「与えられた」「担わされた」などを、文法では直接受身であること、文

脈によっては客観性も話し手の感情も表現すること、話し手の立場と視点との関係などから説明する。では、文脈によって解釈が変わる受身を話し手が使う理由は何か。この点について、コミュニケーション論のことばレトリック、つまり米国大統領の演説における話し方の研究を援用し、話し手の意図が聞き手への働きかけとどのように関連があるかを考察する。特にことばレトリックのアポロギアという話し方の戦略（否定・分断・補強・超越）を取り上げ、受身が現れた文脈から話し手の意図と受身の使用の関係を考察するという試みについて発表する。

参考文献：岡部朗一 1992. 『政治コミュニケーション』.有斐閣選書

7. 連辞型響鳴におけるトークンと生起傾向

伊澤宜仁（慶應義塾大学）

本研究はDu Bois (2001)による対話統語論(dialogic syntax)に基づき、話者をまたいだ類似発話、すなわち響鳴(resonance)に着眼する。対話統語論は、響鳴を連辞・連合関係によるダイアグラフ(diagraph)に基づき記述・分析するが、Du Bois (2001)は、特定のトークンが響鳴においてくり返されることで、そこから構造が創発する可能性を指摘している。この点について、本研究は大規模な英語対話コーパス(SBCSAE)から響鳴の事例を抽出し、ダイアグラフによる記述を施した上で、トークンの観点から分析を行うことを試みる。特に、響鳴の下位分類である連辞型響鳴(frame resonance)をコーパスから収集し、使用されるトークンについて機能語・内容語・品詞等の観点から考察を加える。

参考文献

Du Bois, J. 2001. "Towards a Dialogic Syntax". University of California, Santa Barbara [manuscript].

Tannen, D. 1989. Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse. Cambridge: Cambridge University Press.

崎田智子・岡本雅史. 2010. 『言語運用のダイナミズム-認知語用論のアプローチ』 研究社.

8. Gender-related variation in the responses to criticisms: A contrastive study of Taiwanese and American speakers

TUAN, Huitsen Jeanne (Shu-teUniversity)

YAO, Hui-mei (National Penghu University)

The purpose of this research project is to examine the effect that gender has on responding techniques to the act of criticisms in Chinese and English corpus. The empirical analysis is based on data obtained through IDCT (Interactive Discourse Completion Task) scenarios, responded to by Taiwanese Chinese and American English speakers. Sociocultural variables built into the data are, first and foremost, gender (both speaker- and addressee-gender), as well as the relative power status between speaker and addressee. Significant results are found in three dimensions. First of all, with regards to sex differences, there appears not to be significant difference between men and women in their responding utterances to previous criticisms. Secondly, there is strong evidence that the addressee's gender has a significant impact on the formulation of responding to the previous criticisms. Thirdly, there are different distributions of responding strategies seen to be subject to cross-cultural and power variation.

References: (1) Holmes, J. (2006). Gendered Talk at work: Constructing Gender Identity through Workplace Discourse. Malden, MA: Blackwell. (2) Muntigl, P., & Turnbull, W. (1998). Conversational structure and facework in arguing. Journal of Pragmatics, 29, 225-256.

9. イギリス英語会話と日本語会話の言語・非言語行為に対する印象—母国語話者への

インタビューデータより—

藤村ウィルソン香予（安田女子大学）

本発表では、会話に見られる4つの言語・非言語行為（相槌、間、付加疑問と終助詞、繰り返し）における話者の意図と使用目的を明らかにするために行われたインタビューの結果を報告する。

被験者には実際に録音された会話を聞いてもらい、それぞれの言語・非言語行為が含まれた会話に対する印象やコメントを述べてもらった。これらの結果をイギリス人と日本人の間で比較検証すると共に、イギリスに滞在する日本人が日本に住む日本人と異なる見解を述べていることについても論じる。また、被験者がコメントを述べる際に繰り返し使用していた表現にも着目し、イギリス人と日本人の被験者達が会話を進める際に大切としている概念や会話の目的についても考察する。データやインタビューの仕方で異論があると考えられるが、会話分析を行う際にインタビューという方法を取り入れることも可能であることを提案していく。

参考文献：Bell, J. (1999). *Doing Your Research Project*, Milton Keynes: Open University Press.
Kasper, G. (2000). Data Collection in Pragmatics Research, in Spencer-Oatey, H (ed.) *Culturally Speaking, Managing Rapport through Talk across Culture*, London: Continuum, 316-341.

10. Reconsidering future tense markers in Indonesian MIYAKE, Yoshimi (Akita University)

Indonesian has no inflectional means of marking future tense; instead, there are four independent words which carry future tense meaning and which occur with high frequency. *Akan*, *hendak*, *ingin*, and *mau*, are syntactically of a familiar type, being auxiliary verbs that immediately precede the main verbs.

Among those auxiliary verbs, *akan* has been considered the most generally used future tense marker, as shown in (1).

- (1) *besok akan turun hujan*
tomorrow akan fall rain
'Tomorrow it will rain.'

The other three auxiliary verbs are considered to denote desire and willingness. Of them *mau* is the most often used, as in (2) and (3) below.

- (2) *mau makan apa?*
mau eat what
'What do you want to eat?'

- (3) *aku mau es krem*
1st p mau ice cream
'I want (to eat) ice cream.'

As has been discussed (e.g. Bybee 1985), as in many other languages, it is clear that these auxiliary verbs have developed from verbs denoting desire. However, I argue that the most frequently used auxiliary verb *mau* has started to be used to denote future tense for near future and evidentials, many times losing the meaning of 'desire'. Compare the following sentences (4) and (5) with the (1) above:

- (4) *mau turun hujan.*
mau fall rain
'It is about to rain.' (It looks like it's going to rain.)
- (5) *tim kami mau kalah.*
team 1st p.pl mau lose
'Our team is about to lose.'

Mau in (4) and (5) functions more as a presumptive. **Speakers of both of (5) and (6) predict the near future as there is a certain evidence for that based on their previous experiences.**

This paper reconsiders extended uses of auxiliary verbs to express the future tense, especially *mau*. This study also shows how a verb denoting 'desire' gradually develops into one denoting simple 'future'. I will show a variety of uses of *mau* observed in modern Indonesian literature and media.

11. Comparing self-face and group/family-face with reference to Korean apologies

HAHN, Jee-Won (Pukyong National University)

The purpose of the study is to look at how a person deals with face when it is involved with self and when it is also involved with group. The comparison was made by examining apology rates and how apology strategies vary according to face types. An analysis was made to examine first, the use of apologies and compares the occurrences of apologies in different situations. Secondly, the content of apologies was analyzed in order to ascertain the types of apology strategies used. It is possible to put forward two possibilities for apologies. 1) People may apologize less in family scenarios than self ones because the speaker does not commit the offense and take less responsibility (shouldn't this be apologize "less" changed to less 2) People may apologize more in self scenarios than family ones because the speaker commits the offense and needs to take responsibility for what happened. The primary question is to test these two assumptions and find out which one is true or more prevalent. Furthermore, politeness strategies are identified across the scenarios and then compared in relation with different types of data. This study attempts to examine apology strategies used for either group face or for self face.

Goffman introduced the notion of face as 'the positive social value a person effectively claims for himself' (1967:5) face is claimed by an individual during an interaction. Brown and Levinson's (1987) face based on Goffman is defined as something as the individual bears and elaborated through the use of concepts such as a Model Person and the positive and negative face. However, ethnocentrism from a Western focus on individualism has been pointed out as problematic since the traditional politeness theory neglected the evidence of group-face that is present in many other cultures, such as those in Asian and African societies. Research (de Kadt 1998; Gu 1990; Matsumoto 1988) working on non-Western societies such as African, Chinese, and Japanese politeness groups such as family, company, or nation demonstrated face as associated with entities such as family, company, and nation societies.

The data came from the prior and ongoing cross-cultural research on face and apologies. Within politeness theory, apologizing is to remedy the offensive situation and threatening to the speaker. Apologizing is an act occurring in response with when someone has committed an offense in order to reduce face-threatening acts so apologizing is classified as negative politeness strategy (Brown and Levinson 1987). American data and Korean data was collected for group-face and on-going study on self face (in preparation with publication). Korean data were included for comparison. The current study shifted the comparison to the source of face from cross-cultural comparison to making a comparison between different types of face. Using a discourse completion task, data was collected in the scenarios other things are under similar condition. In the study of group face, the speaker (i.e., the apologizer) responding to apology scenarios the one who is a family member of whom committed the offense. The second data used for self face was collected when the speaker committed the offense. The scenarios used for group face were modified in order to collect data for self face.

References

- Brown, Penelope & Stephen C. Levinson 1987 *Politeness: Some universals in language use*. Cambridge: Cambridge University Press.
- de Kadt, Elizabeth. 1998. The concept of face and its applicability to the Zulu language. *Journal of Pragmatics* 29(2): 173-191.
- Goffman, Erving. 1967. *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. New York: Pantheon.
- Gu, Yueguo. 1990. Politeness phenomena in modern Chinese. *Journal of Pragmatics* 14: 237-257.

Matsumoto, Yoshiko. 1988. Re-examination of the universality of face: Politeness phenomenon in Japanese. *Journal of Pragmatics* 12: 403-426.

12. Understanding Editorial Cartoons via Cognitive Models and Social Interactions

SHU-PEI, Hsiao (National Taiwan University)

The study aims to explore how the role of cognitive models play when understanding editorial cartoons. How pre-stored images render linkages to editorial cartoons which are displayed without any compatible parts and how the invisible idealized conceptual models interact with readers' perception of the editorial cartoons are the main concerns of the study. *Gestalt* and *Idealized Cognitive Models* are important strategies which underpin human's perception in linking correlations between visible and invisible images and facilitate authors' opinions to be readable and acceptable by readers.

References: (1) Lakoff, George. 1987. *Idealized Cognitive Models*. In *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago/London: The University of Chicago Press. (2) Teng, N. Y. 2009. Image alignment in multimodal metaphor. In Charles Forceville & Eduardo Urios-Aparisi (eds.), *Multimodal Metaphor*. Berlin: Mouton de Gruyter.

13. 会話の推意としての‘proximal’—尺度推意を用いたコ系とア系の分析—

平田未季（北海道大学大学院）

従来コ系、ア系の意味はそれぞれ [+proximal], [-proximal] と記述されてきた。この記述からはコ系とア系が対称性を持つことが予測されるが、実際はコ系とア系の使用には非対称性がある。ア系が [-proximal] の指定通り、話者に近接する対象は指せないのに対し、コ系は使用可能な範囲が広く、話者から遠の対象をも指しうる。本発表は、この非対称性は両者の情報量の差に由来すると考える。コ系は距離をコード化せず、対象が発話場面にあることを示す‘DEM’ (Enfield 2009) という意味のみを持つのに対し、ア系は‘DEM’に加え [-proximal] をコード化し、対象の空間的位置をも特定する。情報量に差があるコ系とア系は、情報提供性の尺度を形成する。尺度上の意味が弱い項目の使用は、意味が強い項目の逆を推意する (Levinson 2000)。従って [+proximal] は、コ系の意味ではなく、情報量の異なる代替形、ア系の存在により生じる尺度推意だと考えられる。

参考文献：(1) Enfield, N. J. (2009) *The anatomy of meaning: Speech, gesture, and composite utterances. Language, culture and cognition* 8. Cambridge: Cambridge University Press. (2) Levinson, S. C. (2000) *Presumptive meanings: The theory of generalized conversational implicature*. Cambridge and London: MIT Press.

14. 日本語と中国語における「ほめ」表現 一目上への「ほめ」行動の比較—

楊 一林（金沢大学大学院）

本研究では、日中大学生を調査対象者に、相手が目上である先生の場合、「ほめ」を意図とした発話を記入してもらい、その表現方法や表現形式について、分析・考察を行なった。また、日本語と中国語の類似点と相違点を明らかにし、その異同が何を意味するのかについて考察する。ほめ行動は、相手に関心がなければならず、円滑な関係を構築するために必要な言語行動である。しかし、それをどのように表現し、伝えるかは言語、社会、文化によって異なる。日本語では、ほめる際、その発話が「ほめ」であることをはっきり示す肯定的評価語を用いる傾向がある一方、中国語では、なぜほめるのか、あるいは「ほめ」の具体的な根拠などを言及し、自分の意見や感想を詳しく述べる表現が多いことを明らかにする。

参考文献：(1) 川口義一・蒲谷広・坂本恵. 1996. 「待遇表現としての誉め」. 『日本語学』15号, 13-22. (2) 金 庚芬. 2012. 『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』. ひつじ書店.

15. 合コンにおける「褒め」の分析—ポジティブ・ポライトネスの観点から—

谷 智子 (三重大学) 大塚生子 (大阪大学大学院)

本研究は、合コンにおいて異性に対する「褒め」がどのように表れ、初対面からの一連の会話の中でどのような変遷をたどるのかについて分析を行うものである。

「褒め」は会話全体に散見されたが、分析の結果、初対面から会話が進行するに従ってその性質、特に「褒め」の対象が以下のように変化していくことがわかった。

1. 所属・帰属的要素
2. 行動に関する要素
3. 人格・資質的要素

Brown and Levinson(1987)によると、「褒め」というポジティブ・ポライトネスは、FTA への補償行為には当たらないとされており、FTA 度合いの見積もり公式などの方法で選択するストラテジーを規定することができない。よって単純にポジティブ・ポライトネスの一ストラテジーとして捉えられてきたが、本研究では人間関係に応じてその性質が変化していく場面が観察されたといえる。

参考文献

Brown, P. & Levinson, S. C. (1987). *Politeness. Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge university press.

16. 日本語名詞句トートロジー再考：「AはAだ」

山本尚子 (奈良女子大学)

日本語の「仕事は仕事だ」や英語の *Business is business* といった名詞句トートロジーには、漠然と「否定的な機能」があることはすでに指摘されていた。しかし、その「否定的な機能」が明確には何であるか、また、それが何から生じるかについては未解決であった。本発表では、他の文に埋め込まれることなく、単独で生起する「AはAだ」のデータ観察に基づいて、「AはAだ」にコード化された意味は何かを考察する。そして、「AはAだ」は、それによって伝達される想定が、発話時点の話者以外の誰かに帰属する、主語Aの指示対象に関する想定と矛盾し、それを削除するように処理されることを要求する構文であるという規定を提案する。このような分析結果は、Blakemore (1987)によって提案された手続き的コード化という概念が、語彙レベルだけではなく、構文レベルにおいても成立することを示唆している。

参考文献：(1) Blakemore, Diane. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Blackwell. (2) 辻本智子. 1996. "Tautology in Discourse." 『尾崎寄春・大沼雅彦両教授退官記念論文集』127-136. あぽろん社.

研究発表 (14:00~16:25)

A会場 [02-B1-02] 英語発表

1. A Study of Impoliteness in *Kang Xi Lai Le* from the Perspective of Adaptation Theory

HUANG, Mei Ling (Providence University)

This research aims to help understand how impoliteness works and investigates the phenomenon of impoliteness in a popular talk show program - *Kan Xi Lai Le* - in Taiwan. The data were collected from a selected channel 中天電視 *CtiTV* in Taiwan from June 1st to 14th in 2012. This research adopts Bousfield's (2008) impoliteness classification to approach impoliteness from the perspective of Verchueren's (1999) Adaptation Theory to explain the phenomenon of the impoliteness.

The analysis shows that impoliteness is found to be very common in the talk shows. There are two possible reasons to explain why hosts deliberately use impoliteness strategies: (1) the hosts try to manufacture the subject of a talk; (2) hosts tend to reinforce audience's impression with the guests.

References: (1) Bousfield, D. (2008). *Impoliteness in interaction*. Amsterdam: John Benjamins Pub. (2) Verschueren, J. (1999). *Understanding pragmatics*. London: Arnold.

2. A Presupposition Study on News Anchors Language: A Case Study of Next TV

WANG , Cong Wei (Providence University)

This research investigates the presupposition triggers in news anchors' language from a pragmatic perspective. 100 news videos were collected from a selected channel 壹電視NEXT TV in Taiwan from two sources including TV news and internet news from March to June in 2012. Two analyses were conducted. First, the presupposition triggers in news anchors' language were analyzed. Second, implicatures in news anchor's language were analyzed. In order to examine the use of presupposition triggers in news anchors' language, Levinson's (1983) classifications of presupposition triggers were adopted in this study. The results indicate that presupposition is a common phenomenon in news anchors' language. The employment of presupposition brings about three main effects: 1) presupposition makes news anchors' language more direct; 2) presupposition increases the entertainment effects and news information; (3) presupposition enhances duplicity and inductivity of news program.

References: (1) Huang, Y. (2007). *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press. (2) Leech, G. N. (1981). *Semantics: The Study of Meaning* (2nd ed.). Harmondsworth: Penguin. (3) Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

3. A Comparative Study of the Corpora for General and Specific Purposes for a Pragmatic Study

SUZUKI, Toshihiko (Waseda University)

This study attempts to investigate what can be provided by a corpora specifically designed for a pragmatic study, the presenter's speech acts corpora (SAC), and that by existing large-scale English corpora for general purposes – the BNC (British National Corpus) in this study – in the studies of English speech acts and politeness.

In this particular case study, the two English speech acts "Inviting" and "Suggesting" were used to make a comparison between the SAC and the BNC with regard to linguistic strategies along with the contexts in which these two speech acts occur.

The presenter's findings are to address how to keep a good balance between the two types of corpora, i.e. the corpora for general purposes and those for specific purposes, in pursuit of more efficient and elaborate pragmatic study. They are also assumed to be useful in considering how to design more advanced corpora for such specific purposes.

4. Characteristics of descriptive texts produced by intermediate and upper-intermediate learners of English

YAMADA, Yoko (Kansai Gaidai University)

To organize information, we select information, decide the order in which the information is organized and choose expressions to linearize the information. Previous studies within the quaestio framework (Stutterheim and Klein 1989) have investigated characteristics of L2 learners' organizing information mainly based on advanced learners' descriptions. However, analyzing advanced learners' descriptions is not enough to capture the whole picture of the developmental process of L2 learners' organizing information. This study is part of my project which explores characteristics of L2 learners' organizing information, and specifically examines the influence of learners' proficiency level, focusing on descriptions produced by less proficient learners.

B会場 [02-B1-01] 日本語発表

1. 日本語の促音便形複合動詞の構成と意味形成

史 春花 (神戸大学大学院)

本研究は、「追っかける」、「突っ走る」、「引っ叩く」のようなV1の部分に促音が見られる「促音便形複合動詞」を対象とする。これらの複合動詞は、「くだけた文体的価値」や「俗っぽいイメージ」を持つ、と指摘されている(斎藤1992, 高山 1993, Akita 2011)。本研究は、このような特徴を促音便形複合動詞が持つ「文体的意味」とし、促音便形複合動詞の意味を「文体的意味」と「実質的意味」とに分けて考える上で、促音便形複合動詞の意味形成及び語構成について、以下のことを明らかにする。1) 促音便形複合動詞はコンストラクションであり、その形式は[V1QV2] V (V1Q=V1の促音便形) というスキーマで捉えることができ、構成要素に還元できない「文体的意味」は[V1QV2] Vというスキーマに対応して生じる性質である。2) 「文体的意味」の形成は、V1の母音無声化の音声・音韻メカニズム(Maekawa & Kikuchi)から動機付けることができる。3) 「実質的意味」の形成は、V1の意味の希薄化と大きく関連する。

参考文献: (1) 斎藤倫明. 1992. 『現代日本語の語構成的研究—語における形式と意味—』

(2) 高山知明. 1993. 「複合語における促音挿入と接頭辞『ブッ』『ヒッ』等を持つ類との干渉回避について」『香川大学国文研究』18: 62-68. (3) Maekawa, K. & H. Kikuchi. 2005. Corpus-based analysis of vowel devoicing in spontaneous Japanese. in *Voicing in Japanese*. pp. 205-228

2. 現代英語における話し言葉と書き言葉の文法的差異に関する語彙的な研究—主語省略と知覚動詞

柴田かよ子 (京都府立大学大学院)

本発表では話し言葉と書き言葉における文法的差異の一つである「省略」、とりわけ、「主語省略」がどのように生じているのかという問題について、コーパスを用いて、動詞別、主語別、spoken/written English 別にデータ进行分析し、主語省略が生じる仕組みを意味論と語用論の観点から探求する。主語省略に関与する因子としては、ジャンル、コンテキスト、Speech Level 等、様々な要因が多くの研究者により指摘されている。本発表では、これらの要因に加えて「動詞そのものが、主語省略の可、不可を決定することがある」と主張する。とくに知覚動詞に注目し、なぜ知覚動詞で省略頻度が高いのか、なぜ *listen to*, *look at* では省略が余り見られないのかの問題に解答を与える。併せて、主語省略と *fixed expressions* との関わりについても考察する。

参考文献: (1) Carter, R. & M. McCarthy (2006). *Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

3. マスメディアの科学ディスコースに現れる数値表現の認識—数値間の相違性に依拠した論証に着目して—

出口由美 (関西大学大学院)

本発表は、マスメディアを通して科学的な知識を伝達するディスコースを考察し、ディスコース上に現れる数値が特定の論証的意味効果をもつ時、それがどのような認知メカニズムによって理解されるのかを検討する。数値が論証的な効果をもつケースのひとつとして、ディスコース上の2つまたはそれ以上の数値間の相違性を強調することに依るものがある。本研究ではこうした数値使用に着眼しながら以下の2点に取り組む。まず、認知言語学的な観点から数(学)を論じる、Lakoff & Núñezの「数学的概念の分析学 *Mathematical ideas analysis*」の観点から、数値間の相違性を認識する場合にみられるイメージスキーマを特定する。続いて、2つまたはそれ以上の数値間の差の見せ方に関する側面に取り組む、ディスコースの生産者が、その論証的効力を高めるために用いるディスコース的方略を明らかにする。

参考文献: (1) Lakoff, G. & R. Núñez. 2000. *Where Mathematics Comes From: How the Embodied Mind Brings Mathematics into Being*. New York: Basic Books. (2) Perelman, C. 1997. *L'empire rhétorique, Rhétorique et argumentation*. Paris: VRIN.

4. アメリカ英語における定形節補部を伴う連結詞的知覚動詞の使用の発達について：

The Corpus of Historical American English の調査に基づいて 中村文紀（慶應義塾大学）

本発表の目的は、従来静的に捉えられてきた現代英語を、徐々に変化する動的な存在として捉えなおし、その変化の具体例を示すことである。言語を社会的な構築物として捉え、徐々に変化するものと仮定した場合、その変化は個人の直感を超えるため、質的な分析に加え大規模コーパスにおける量的な変化として分析する必要がある。分析では、連結詞的知覚動詞の *look* とその類義語 *seem* において、語用論的な要請の結果、形態的な変化と意味の再解釈が生じていることを示す。*The Corpus of Historical American English* の調査から、定形節補語{as if/as though/like}節について、もともと主語と比較するための仮想的な比較対象として生じてきたものが、次第に節の内容自体が話し手の主張したい内容になる用法に変化し、その用法が次第に増加してきたことが明らかとなった。

参考文献：Whitt, Richard. 2010. *Evidentiality and Perception Verbs in English and German*. Oxford: Peter Lang.

C 会場 [02-B1-04] 日本語発表

1. 多重質問の *sarcasm* と修辭性

後藤リサ（奈良女子大学博士研究員／関西外国語大学非常勤講師）

本発表の目的は、伝統的な論理学において多重質問と呼ばれる、複数の前提をもつ疑問文発話について、前提否認の文脈想定が多重質問の修辭性をもたらす根拠となり得るかどうか、およびその話者態度に潜む *sarcasm* との相互効果について考察することである。修辭性の程度の認知と *sarcasm* の程度の認知は、それぞれ異なる因子（即ち、話者の答えへの期待、話者の前提命題への態度）により制御されるため、相関関係は厳密にはないといえる。しかし、*sarcasm* をもたらす前提命題への話者態度が強められるほど、疑問文の「情報を求める」という本来の機能が薄れると予測する。この予測を裏付ける発話例の認知プロセスについて、Sperber and Wilson (1986, 1995) の関連性理論の視点から考察する。

参考文献：(1) Walton, D. N. 1988. 'Question-Asking Fallacies', in Question and Questioning. M. Meyer (ed.), New York: de Gruyter, 195-221. (2) Wilson, Deirdre and Sperber, Dan. 2012. *Meaning and Relevance*. Cambridge: Cambridge University Press.

2. 日英語話者の事態把握と「（反語）命令文」の認知語用論研究

佐藤晃紀（札幌大学大学院）

本発表では日英語の命令文について、「嘘をつけ」のような反語命令が日本語では日常的に用いられるのに対して、英語ではそうではないのはなぜかを認知言語学の視点を通して森（2006）を概観し、その不備を指摘することによってメカニズムを明らかにする。具体的には中村（2004, 2009）に代表される研究である日英語の性質を主観性/客観性、間主観性という視点から捉えることでこの問題に迫り、コーパス・データに基づいて語用論的な視点から考察することを通して、本発表の主張が十分妥当性を有することを述べる。

参考文献：(1) 森英樹. 2006. 「3つの命令文」『言語研究』129: 135-160. 日本言語学会. (2) 中村芳久 編 2004. 『認知文法論Ⅱ』大修館書店. (3) 中村芳久 2009. 「認知モードの射程」『「内」と「外」の言語学』353-393, 開拓社.

3. 視点、文脈と指標性—英語指示詞における聞き手への視点移動の現象を中心に—

澤田 淳（青山学院大学）

英語では、話し手の近接領域にある事物を直示的に指示する場合、通例、*this* が選択される。しかし、次の例では、話し手であるホームズは自身の手の中にある事物を *that* で指示している。

- (1) Look at that!” He held out his hand. On the palm were three little pyramids of black, doughy clay. (Arthur Conan Doyle, *The Adventure of the Three Students*.)

Kaplan (1989) は、指標詞の視点は常に話し手に固定されるとしたが、近年、Schlenker (2003) は、アムハラ語の一人称代名詞が態度動詞の埋め込み文内に現れた場合、主文主語への視点移動を許すとした。しかし、(1) のような聞き手への視点移動を示す指標詞シフトの現象は注目されていない。本研究の英語指示詞のデータは、指標詞の語用論研究に対して新たな問題を投げかけるものである。

参考文献：(1) Kaplan, David. 1989. Demonstratives: An Essay on the Semantics, Logic, Metaphysics, and Epistemology of Demonstratives and Other Indexicals. In: Joseph Almog, John Perry, and Howard Wettstein (eds.) *Themes from Kaplan*. 481-563. Oxford: Oxford university Press. (2) Schlenker, Philippe. 2003. A Plea for Monsters. *Linguistics and Philosophy*. 26: 29-120.

4. 「左・右の周辺部 (Left and Right Peripheries)」と「主観性・間主観性」との関係は？－歴史語用論における考察

小野寺典子 (青山学院大学)

「周辺部」(periphery) は、発話の両端を意味し、「発話の冒頭」部分は「左の周辺部」(left periphery; LP)、「発話末」は右の周辺部(right periphery; RP) と呼ばれる (Beeching and Detges forthcoming)。周辺部は、最近、研究が始まった新しい概念だが、1990 年代から注目を集める文法化、それに伴って現れることが多い「主観化」・「間主観化」(Traugott 2003)、また談話標識の歴史的発達などとも大きく関係し、現在、各言語で観察が進められている。

本発表では「言語形式－機能(間/主観的意味)－周辺部(LP と RP)」の対応を考えた際、欧米語で傾向として考えられる「LP－主観性、RP－間主観性」という対応とは異なり、日本語では「LP・RP 両方で主観性・間主観性」を表すという対応を提案し、「形式－機能－周辺部」の対応を、異言語間で考察する。

参考文献：(1) Beeching, Kate and Ulrich Detges (eds.). forthcoming. *The Role of the Left and Right Periphery in Semantic Change*. Studies in Pragmatics. Oxford: Elsevier. (2) Traugott, Elizabeth Closs. 2003. “From subjectification to intersubjectification.” In: Hickey, R. (ed.), *Motives for Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press, 124-139.

D 会場 [02-03-01] 日本語発表

1. 直接的認識表現ヤハリの生成過程：日本語の「含過程構造」のコード化

氏家洋子 (ノートルダム清心大学)

日本語には目前の事態を認知した時、それを話し手の持つ記憶や知識と結び付けて一語(句)で表現する「含過程構造」というものがある。一例としてヤハリを取り上げ、近現代の日本語辞書の記述史の検討 **A** を通してその生成過程を探り、この語に示される話者の認識内容を日英語対照研究 **B** も含めて明らかにすることを本考察の目的とする。**A** から①事態の固定(空間的)への注目に発したものが、②a 事態の継続(時間的)へ、さらに②b 個と他との比較への注目に及び、それが次第に③以前の事態や固定観念、さらに④伝聞内容や予想との一致へと着目点が移行・発展するさまが認められた。①は客体的事態の表現であるが、次第に話し手の直接的認識の表現(時枝 1953)へと発展しており、また、①から④に通底する意味も認められる。**B** からは客体的表現は英語相当語句に置き換えられ、主体的表現は相当語句非在に発する無視や数種の問題点が認められることを明らかにした。

参考文献：(1)時枝誠記. 1953. 「言語における主体的なもの」、『金田一博士古希記念 言語民族論叢』(2)氏家洋子. 1996. 『言語文化学の視点』おうふう. (3)Ujiie, Y. 2012. “The difference of epistemic contents of Japanese subjective word *yappari* and its English equivalents”, 6th Lodz Symposium: New Developments in Linguistic Pragmatics, Univ. of Lotz, Poland, *Book of Abstracts NDLP2012*, 149-150.

2. on the contrary の意味と対立関係

黒川尚彦（大阪工業大学）

本発表では、関連性理論の立場から on the contrary（以下、OTC と略）の意味は対立関係の存在を示すマーカーであることを提案し、Fraser の問題の解決を図る。Fraser (1998, 2009) の主張は次の2点である。①(1)のような場合 S1 は否定文という制約があり、(2)の対話の場合ではそのような制約はなく、②いずれの場合も、OTC は S1 を誤った表象、S2 を正しい表象として提示するマーカーで、S2 によって S1 を修正する機能を果たす。しかし、(3)から①②の主張は妥当でない。

(1) Mary didn't make a trivial mistake. *On the contrary*, she made a horrendous error.

(2) A: I suppose the job was boring? B: *On the contrary*, it was really exciting.

(3) Unfortunately, he broke a leg. *On the contrary*, fortunately, he didn't have to go to war.

参考文献: (1) Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell. (2) Fraser, B. 1998. "Contrastive Discourse Markers in English." In *Discourse Markers: Descriptions and Theory*. 301-326. (3) Fraser, B. 2009. "The English Contrastive Discourse Marker *On the Contrary*." In *Language in Life, and a Life in Language: Jacob Mey – A Festschrift*. 87-95.

3. 「XのほうがもっとPだよ」中の「もっと」の語用論的機能 森 貞（福井工業高等専門学校）

「YはPだよ」という発話に対して、【P : Y < X】の認識を有する話者は「XのほうがPだよ」と応答する場合と「XのほうがもっとPだよ」と応答する場合がある。前者の表現は【P : Y < X】の認識を過不足なく伝えることができることから、談話における後者の表現の使用（「もっと」の顕現）には極めて語用論的な（間主観的な）要因が関与していると予測することが出来る。談話における「上司・先輩」および「部下・後輩」に対する両表現間の使用選好度を調査した結果、「XのほうがもっとPだよ」を「XのほうがPだよ」に比べて丁寧度の低い表現と見なす集団と逆に丁寧度の高い表現と見なす集団が存在することが明らかになった。この事実を基に、「XのほうがもっとPだよ」中の「もっと」には【共同注視促進機能】と【他者の観点認定機能】の2つの機能があり、どちらの機能に重きが置かれるかによって、「もっと」が顕現する発話文の丁寧度が変わることを論証する。

参考文献: (1) 中村芳久 2010. 「否定と（間）主観性」, 『否定と言語理論』加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美(編), 424-442, 開拓社, 東京. (2) Verhagen, Arie 2007. "Construal and Perspectivization," In D. Geeraerts and H. Cuyckens (eds.), *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*. Oxford: Oxford University Press. pp. 48-81.

4. 談話標識 I mean の意味体系とその使用原理

小林 隆（金沢大学大学院）

談話標識 I mean についてこれまで指摘された語用論的機能は記述的なものが多く、そもそも「なぜ I mean が修正として用いられるのか」、その使用原理に関する議論はなされなかった。I mean の字義的意味の反映が大きいことは予測できるが (Schiffrin (1987))、この表現が「理由づけ」や「例示」などの異なる語用論的意味 (Brinton (2008)) を帯びることをその字義的意味のみから説明することは難しい。本発表では、会話の公理 (Grice (1989))、ポライトネス理論 (Brown and Levinson (1987))、および認知言語学の間主観性 (Verhagen (2005, 2007)) の観点から、話し手が I mean を用いる動機として、グライスの公理の逸脱、相手のフェイス侵害、話し手と聞き手の想定の違いが、その使用原理に深く関与していることを明らかにする。

参考文献: (1) Brown, Penelope and Stephen C Levinson. (1987) *Politeness. Some Universal in Language Usage*, Cambridge University Press, Cambridge. (2) Grice, Paul H. (1989) *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, Cambridge, MA. (3) Verhagen, Arie (2005) *Constructions of intersubjectivity: Discourse, syntax, and cognition*, Oxford University Press, Oxford.

E 会場 [02-03-02] 日本語発表

1. 中国語の指示詞による総称表現について — 英語との比較を兼ねて

劉 龔 (京都大学大学院/日本学術振興会)

これまで、中国語の指示詞による総称表現に関する問題を扱った研究はまだ見られない。このため、本稿では英語との比較を兼ねて、中国語の指示形容詞による総称について考察を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、中国語の指示形容詞による総称に関しては、「社会・文化的に確立された類でなければならない」「基本カテゴリーの下位カテゴリーの語でなくてはならない」という 2 つの制約がある。しかし、「述語は評価的でなければならない」という制約がない。

次に、中国語の指示形容詞による総称を表す場合は、複数形の「那些」及び単数形の「那个」は使われるが、「那+専用の量詞」は用いられない(指示代名詞の場合も同様)。

さらに、指示代名詞による総称の場合、中国語では<トークンタイプ>の照応関係による総称表現が成立しないため、複数形の指示代名詞「那些」は用いられず、単数形の指示代名詞「那个」のみ用いられる。

参考文献：(1) Bowdle, Brian F. y Ward, Gregory L. 1995. “Generic Demonstratives, General Session and Parasession on Grammaticalization”, *BLS21*. Pp.32-43. (2) Prince, E.F. 1992. “The ZPG letter: subjects, definiteness, and information-status”. *Discourse description: diverse analyses of a fund raising text*. Philadelphia: John Benjamins. Pp.295-325.

2. On “be lined with”

黒宮公彦 (大阪学院大学)

本発表では英語の be lined with という句の、語の意味のみからは予測し難い振舞いについてコーパスを用いて観察し、その語用論的な使われ方について考察する。具体的には以下の 2 点を主張する。第一に、この意味で用いられる動詞 line は受動文で用いられることが能動文に比べはるかに多い。そして第二に、“NP1 is lined with NP2” は多義であるが、この多義性は NP1 や NP2 の意味、あるいは文中の副詞要素(とりわけ up) などによって解消される。とりわけ第二の点の、語義が決定されるための名詞句の条件を中心に見ていくことにする。

参考文献：(1) Sinclair, John M. 1991, *Corpus, Concordance, Collocation*. Oxford: Oxford UP. (2) Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions*. Chicago: The U. of Chicago P.

3. 日本語の一人称語の人称転換と消費者の自己実現

西田光一 (下関市立大学)

本発表では、広告での人称表現の文法が消費経済の原則を反映することを指摘し、ミクロ語用論を通じて実践されるマクロ語用論(cf. 児玉(2012))の一例を示す。「目覚めよ、私の美白力」といった化粧品の広告が示すように、日本語の一人称語は広告や記事のタイトルで人称転換を起こし、当該の商品を買おうとする人を表す。山口(2011)は、話し手本人を直示の中心とする直示語と、話し手と聞き手の対話空間を中心とする直示語に区分するが、この種の人称転換は後者の特徴を利用している。この人称転換が起きる広告は、当該の広告で宣伝される商品が買い手本人に自己実現をもたらすものに限られる。生産を効率主義と時間の節約に基づく行動とし、対極的に消費を充実した時間の消耗を目的とした行動と定義する山崎(1984)の説を援用し、問題の人称転換は消費による自己実現に動機づけられ、各消費者に自分の時間を充実させるように促す宣伝効果を持つことを論じる。

参考文献：(1) 児玉徳美(2011)「言語分析への提言」『語用論研究』第 13 号、pp.32-37. (2) 山口治彦(2011)「英語との対照」益岡隆志(編)『はじめて学ぶ日本語学：ことばの奥深さを知る 15 章』、pp.205-220. ミネルヴァ書房. (3) 山崎正和(1984)『柔らかな個人主義の誕生：消費社会の美学』、中央公論社.

基調講演(16:30~18:00) [A会場 02-B1-02]

The Pragmatics of Discourse about Global Circulation

Professor Charles L. Briggs (University of California, Berkeley)

Recent work has focused on language and globalization, on the way that language ideologies, linguistic practices, and communicative technologies move through space. My focus is different here: rather than examining the circulation of pragmatics, I examine the pragmatics of circulation.

The corpus consists of scholarly studies of globalization, as drawn from several social science disciplines. These works purport to track the global circulation of capital, people, technologies, cultural forms, epistemologies, and more. Here pragmatics provides me with a means of examining how these cartographies rely upon discourse features that construct the very objects that they seem to be mapping. I am particularly interested here in subjects, subject-positions, and subjectivities; agency; spatial and temporal projections; forms of objectification, materiality, and embodiment; scales and forms of commensurability; modes of objectification; and assessment of affect and ethics.

If we take, for example, David Harvey's famous expression, "...progress entails the conquest of space, the tearing down of all spatial barriers, and the ultimate 'annihilation of space thru time'" (1990, p. 205), what is the pragmatic work undertaken in his text to make this statement comprehensible and to lead readers to take it for a model of contemporary social life?

Here I hope to contribute to recent research on language and neoliberalism (Duchêne and Heller 2012) and on language and globalization (Blommaert 2010) by pointing out how pragmatics can provide a critical perspective on ways that scholars construct the contemporary world and then attempt to transform their models into what seem to be transparent reflections of (and guides to) their objects.

References

Blommaert, Jan. 2010. *The Sociolinguistics of Globalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Duchêne, Alexandre, and Monica Heller, eds. 2012. *Language in Late Capitalism: Pride and Profit*. New York: Routledge.

Harvey, David. 1990. *The Condition of Postmodernism: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*. Cambridge, MA: Blackwell.

12月2日(日曜日)

研究発表 (9:00~11:25)

A会場 [02-B1-02]

1. 日本語名詞句の INDEFINITENESS のかたちについて—素名詞句と叙述名詞句

中井延美 (明海大学)

本発表では、(in)definiteness を名詞句に関わる言語普遍的な概念と捉えた上で、日本語における不定的な NP を素名詞句 (plain NP) として分類する。措定文として解釈される日英コピュラ文 [A is B] と [A は B だ] について、B の位置にくる叙述名詞句 (非指示的) の“かたち”に注目する。He is [a student of this university / the president of this company]. と「彼は[この大学の学生 / この会社の社長]だ」を比較すると、英語では B の位置に定・不定の両方がくるが、日本語ではいずれも不定的な素名詞句に

なる。(In)definiteness を聞き手が選択するコンテキストを限定することに積極的に貢献するかどうかという問題に関わる概念として捉え、日本語の素名詞句は不定的な indefiniteness-oriented の特性を帯びた形式である可能性を論じる。

参考文献：(1) 内田聖二.2000.「定冠詞の機能－関連性理論の視点から－」『言語研究における機能主義－誌上討論会－』．東京．(2) Declerck, Renaat. 1986. “Two notes on the theory of definiteness.” *Journal of Linguistics* 22. 25-39. (3) 西山佑司. 2003.『日本語名詞句の意味論と語用論－指示的名詞句と非指示的名詞句－』．東京．

2. Concession in the academic context: power and expertise factors

LYDA, Andrzej (University of Silesia)

In the area spoken academic communication there has been relatively little attention given to the analysis of discourse-pragmatic relations, the study of which might contribute to our understanding of such practices of scholarly communication as exchanging views and arguing one's position. One of such relation is Concession understood here after Couper-Kuhlen and Thompson's (1999) and Barth-Weingarten (2003), both serving here as a point of reference, as a tripartite relation involving agreement/acknowledgement and disagreement with a previous claim, a fundamental one in the academia. This study focused on the realisation of the agreement/acknowledgement move in English spoken academic discourse and more specifically on contextual determinants of the move. The analysis was performed with the use of data from the interactive speech event component of MICASE corpus. Our study revealed that Concession is sensitive to contextual factors and a factor determining the realisation of Concession is the factor of power and expertise of the speakers' correlated with the factor of age.

References: (1) Barth-Weingarten, D. (2003): Concession in Spoken English. On the Realisation of a Discourse-Pragmatic Relation. Tübingen: Narr. (2) Couper-Kuhlen, E. and S. A. Thompson (1999): “On the Concessive Relation in Conversational English”. In F. W. Neumann and S. Schuelting (eds.): Anglistentag 1998 Erfurt. Wissenschaftlicher Verlag.

3. Subjunctive wh-questions (in German)

MÜLLER, Sonja (Universität Bielefeld/Georg-August-Universität Göttingen)

My aim is to suggest an analysis of (un)acceptable wh-questions in the present subjunctive. Previous accounts argue that the present subjunctive is incompatible with the interrogative sentence mood. Lohnstein (2000) offers a semantic account based on *conversational backgrounds* and *partition semantics*. For English wh-complement clauses, Chiba (2009) argues for an incompatibility on the level of *sentence types*. She thus anchors the restriction between syntax and pragmatics. As a web-based corpus study quarries fully acceptable examples, I'd like to offer a pragmatic account (based on classical *speech act theory* [cf. Searle 1969, 1979]) which traces (un)acceptable present subjunctive interrogatives back to an incompatibility on the level of the illocutions being simultaneously performed. The account makes it possible to explain the unacceptable cases as well as the acceptable ones. The latter make it necessary to be able to speak about concrete discourse participants involved in actual contextual situations, particular distributions of knowledge between the discourse participants as well as the precise illocutionary acts performed in the actual context.

References: (1) Chiba, S. 2009. “Combinations of Different Sentence Types: The Case of Imperatives and Questions.” *The Tsuda Review* 54. 1-23. (2) Lohnstein, H. 2000. *Satzmodus kompositionell. Zur Parametrisierung der Modusphrase im Deutschen*. Berlin. (3) Searle, J. R. 1969. *Speech Acts. An Essay in the Philosophy of Language*. New York. (4) Searle, J. R. 1979. “A

Taxonomy of Illocutionary Acts". In: Searle, J. R. (ed.). *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge. 1-19.

4. The meaning and use of utterance situation-based comparison in Japanese

SAWADA, Osamu (Mie University)

It has been claimed in the literature that the Japanese degree adverb *motto* has two kinds of uses: the „degree“ use and the „negative“ use (Watanabe 1986; Sano 2004). In the literature the degree *motto* is analyzed as an intensified comparative morpheme, while the negative *motto* is analyzed as a kind of contrastive negative marker that conveys that the opposite of the at-issue gradable predicate is true now with respect to the subject. In this paper I argue that the negative *motto* is also a comparative morpheme, but unlike degree *motto* it compares the same individual based on different situations, an expected situation and the utterance situation.

This paper shows that there is a semantic parallelism between an intensifier and an expressive and that the phenomenon supports the multidimensional approach to meaning, whereby at-issue meaning and conventional implicature are reviewed as compositional but dimensionally independent from one another (Potts 2005).

References: (1) Potts, Christopher. 2005. *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford University Press. (2) Sano, Yukiko. 2004. "Motto no hiteiteki youhou ni tuite." *Nihongo kagaku* 15. (3) Watanabe, Minoru. 1985. "Hikaku no fukushi: 'motto' o tyuushinni." *Bulletin of the Language Institute of Gakushuin University* 8.

B会場 [02-B1-01] 英語発表 (前半) & 日本語発表 (後半)

1. A quantitative analysis of noncanonical *though* clauses in naturally occurring discourse

MIZUNO, Yuko (Asahikawa National College of Technology)

Though clauses sometimes have unusual word order in which a certain constituent appears in the position immediately before *though* (e.g. *Unfair though it might be, Cecilia couldn't forgive him*). My aim is to examine what kinds of constituents occur before *though* in natural texts and how frequently each type occurs, and to clarify the commonalities and differences between noncanonical and canonical *though* clauses (e.g. *Though it might be unfair, Cecilia couldn't forgive him*). Based on a survey of 338 tokens of noncanonical *though* clauses taken from fictional stories, I will argue the following points. First, while five categories, i.e., a noun, an adjective, a verb, an adverb, and a prepositional phrase, occur before *though*, they differ greatly in frequency. Second, canonical and noncanonical *though* clauses are different in their positioning patterns and the kinds of usages. Third, canonical and noncanonical *though* clauses are similar in their most frequent usage.

References: (1) Culicover, P. 1982. *Though-Attraction*. Indiana University Linguistics Club. (2) Mizuno, Y. 2010. "A Quantitative Analysis of *Although* and *Though* Clauses: Their Commonalities and Differences." *Studies in English Literature Regional Branches Combined Issue Vol. III*. 47-66.

2. The Discourse Marker "So" in American Media: Teleology Marking in Interaction

O'NEAL, George (Niigata University)

The discourse marker "so" is commonly described as a topic transition signal of some sort: Some English textbook authors have gone as far as to claim that the discourse marker "so" explicitly marks the transition from one topic to another (McCarthy, McCartin, & Sandiford 2006). Some scholars essentially agree and claim that the discourse marker "so" displays an orientation to a

new topic in institutional talk or even just ordinary conversations (Rendel-Short 2000; Ruhlemann 2007). Other scholars claim that the discourse marker "so" is deployed when the speaker begins to implement "incipient action"; that is, the speaker prefaces their first pair part utterances with the discourse marker "so" when the action they are out to initiate represents an action that is not directly coordinated with immediately prior talk (Bolden 2006, 2008).

Using Conversation Analytic sequential analysis, this presentation builds upon this prior research and argues for the following: 1) the discourse marker "so" is a topic transition signal, but it marks a very specific type of transition; 2) the discourse marker "so" marks the transition to the teleological pivot of the interaction itself. In other words, the discourse marker "so" is not used to transition between any and every topic in conversation, but rather the discourse marker "so" is used sparingly and strategically to transition to the topic that represents the main purpose of the interaction from the perspective of the speaker. This presentation argues that the discourse marker "so" displays the teleological orientation of the interaction itself.

This presentation utilizes evidence from American media, such as scripted media such as TV shows and unscripted media such as Podcast interviews, to demonstrate the teleological manifestations of the discourse marker "so" in interactions.

3. *John looks happy. / I saw John happy.* 視覚に関する2つの知覚動詞構文における事態把握のパターン

徳山聖美 (神戸市外国語大学大学院)

本発表では、まず「話し手がジョンの幸せな様子を見た」という共通の事態を表す表題の2つの知覚動詞文のうち、単体では容認不可とされる *I see John happy.*が、三人称(対象)・過去/完了時制を好み、the only time~や when 節のような一時的な状態を描写する一定のコンテキスト下では問題なく容認される事実を示す。また、両構文において、同じ事態に対する事態把握のパターンの違いが、異なる認知プロセスを言語化することを明らかにする。具体的には、主体が外から事態を捉える *I saw John happy.*は知覚の最終局面だけがプロファイルされた報告性・客体性の高い表現であり、主体が経験者として事態の中に入り込んだ *John looks happy.*は当事者的な視座から知覚のプロセス全体をプロファイルした現場性・主体性がより高い表現であることを、使用状況、知覚プロセス、主体性の度合、近接性/遠隔化の観点から示す。

(1) Carlson, Gregory. 1980. *Reference to Kinds in English*. New York: Garland. (2) 本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論：生態心理学から見た文法現象』 東京：東大出版会. (3) Langacker, R.W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: OUP.

(4) 谷口一美(2005) 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 東京：ひつじ書房.

4. 認知叙述類型論の試み：英語の中間構文・他動詞-able 構文と日本語の能動的可能構文・受動的可能構文の事例

對馬康博 (札幌大学)

本発表では認知叙述類型論の試みとして、英語の中間構文・他動詞-able 構文(His handwriting is readable.)と日本語の能動的可能構文(この酒は飲めない。)・受動的可能構文(この星は肉眼でも見られます。)(cf. 寺村 1982)の4 構文を中村(2009 等)の認知モード(I・D モード)と Langacker (1999 等)の認知文法、特に現実次元(Actual Plane, AP)と仮想次元(Virtual Plane, VP)の理論的枠組みとそこに「間主観性(intersubjectivity)」の観点を絡め分析を進めていく。具体的には認識上のI モードからD モードへの移行に伴うインタラクションの希薄化及び脱主体化の度合いと概念上のAP/VP の区別を軸に、そこに話し手と聞き手の間主観性が反映されることで認知類型の一般化が予測され、そこから当該4 構文は意味の住み分け(ecology)を成すという叙述類型が得られることを提案する。

主要参考文献: (1) Langacker, Ronald W. 1999. "Virtual Reality." *Studies in the Linguistic Sciences* 29.2. 77-103. (2) 中村芳久. 2009. 「認知モードの射程」 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明(編) 『「内」と「外」の言語学』 353-393. 東京: 開拓社. (3) 寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味 I』 東京: くろしお出版.

C会場 [02-B1-04] 日本語発表

1. 言葉遊びから生じる発話の力—洒落が駄洒落となる場合の文法的及び語用論的条件—

小松原哲太 (京都大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

本発表の目的は、言葉遊び、特に洒落に関わる修辞表現を語用論の観点から分析し、ある言葉遊びからどのような修辞的效果が生じるかに関する文法的、語用論的条件について考察をおこなうことである。ある言葉遊びが駄洒落となる場合の条件として、次のようなものが考えられる。(i) もじり等による非文法的語彙の使用。(ii) 洒落に用いられる類音性を不当に前景化すること。(iii) 関係性の公理に関する違反が解消されないこと。ネガティブな修辞的效果が生じるような条件を分析していくことで、間接的にポジティブな修辞的效果が生じる条件が示唆される。本発表では、具体事例から駄洒落の特徴を分析することを通して、間接的に巧い洒落に関する特徴を明らかにすることを目指す。

参考文献：(1) Austin, John L. 1962. *How to Do Things with Words*. London: Oxford University Press. (2) Guiraud, Pierre. 1979/1976. 『言葉遊び』東京：白水社。中村栄子訳。

2. 英語広告表現におけるメタ言語否定・意味反転・共有知識からの逸脱に関するズレの階層性

有光奈美 (東洋大学)

本発表では英語広告表現におけるズレの階層性の存在を指摘する。広告は売り手の基本要素 4P (Product, Price, Place, Promotion) のうち、Promotion に働きかける。買い手の基本要素 4C (Consumer value, Cost, Communication, Convenience) のうち、Communication に該当する。広告は商品認識させ、ニーズやウォンツを感じさせ、提案をする。非命令文の広告表現の一部には、Horn (1985, 1989)で紹介されたメタ言語的否定の他、意味の反転、共有知識からの逸脱等のレトリックが見られ、そこにズレの階層性がある。ズレによる効果的広告の実例を挙げ、音韻レベル、語彙レベル、文レベル、談話レベル、共有知識レベルという階層性を指摘する。

参考文献：(1) Barthes, R. 1985. *Le message publicitaire. L'Aventure Sémiologique*. Edition du Seuil. (花輪光 (訳) 1988. 「広告のメッセージ」『記号学の冒険』みすず書房. pp.69-77.) (2) Horn, Laurence R. 1989. *A Natural History of Negation*, Chicago, The University of Chicago Press. (3) 田中 洋・丸岡吉人 (著) 1991. 仁科貞文 (監修) 『新広告心理』、東京：電通。

3. クロージング場面におけるリスナーシップ：日本語会話における笑いとの関係

難波彩子 (岡山大学)

本発表では「びっくりした話」の談話構造の中でどのように笑いがリスナーシップ行動として機能するのかについて明らかにすることを目的とする。本研究では、「びっくりした話」という談話構造の中で、特にクロージングに焦点を置き、リスナーシップに関わる笑いが「びっくりした話」の終結時で起こり、現在から次の話への転換点として機能していることを示す。また、この笑いを伴った転換点での会話参加者のやりとりの詳細にも注目し、笑い与会話参加者同士が持つ共感の関連性について検討する。さらに、笑いを通して、リスナーシップ与会話参加者の人間関係の相関性や、日本語会話とリスナーシップの強固なつながりについて考察する。

参考文献：(1) Sacks, Harvey. 1974. An analysis of the course of a joke's telling in conversation. In Richard Bauman and Joel Sherzer, (eds.), *Explorations in the ethnomethodology of speaking*, 337-353. Cambridge. (2) Yamada, Haru. 1997. *Different games, different rules: Why Americans and Japanese misunderstand each other*. Oxford.

4. 主語名詞句が左方転位化されている日英語の左方転位構文 海寶康臣 (立命館大学客員研究員)

本発表では、(1b)(2b)のように、左方転位化されている要素と同一指示の要素が主文の主語として生起している日英語の左方転位構文には、聞き手志向のタイプと話し手の都合で使用されるタイプがあることを示すとともに、聞き手志向のタイプが談話内で果たす機能と、(1a)(2a)のような無標の語順の文が談話内で果たす機能の違いを、Levinson (2000)のM推意とI推意に基づいて説明する。

- (1) a. That shameless fellow beat his wife again.
 b. That shameless fellow_i, he_i beat his wife again. (井上 1978: 78)
- (2) a. あの恥知らずが自分の妻をまたなぐった。
 b. あの恥知らず_i, あいつ_iが自分の妻をまたなぐった。 (井上 1978: 78)
- (用例中のインデックスは発表者によるものである。)

Rodman (1974)等の先行研究は、左方転位構文を使用する場合、それまでの話題を変更することが要請されるとしている。本考察では、その理由を示したい。

参考文献：(1) Levinson, S. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, MA: MIT Press (田中廣明・五十嵐海理訳『意味の推定』研究社, 東京, 2007) (2) Carlson, L. H. 1982. "Dialogue Games: An Approach to Discourse Analysis." Doctoral Dissertation, MIT.

D 会場 [02-03-01] 日本語発表

1. Semantic Extension of Verb SHIMAU-From a Grammaticalization Point of View-

張 又華 (京都大学)

文法化は、意味の抽象化が進むと共に、名詞や動詞の特徴がなくなり、主に文法的機能を果たす要素になるプロセスである。このプロセスは、連続的で段階性を持つ変化である。日本語の補助動詞「—しまう」は、このプロセスを経て<完了>のアスペクト的意味を表すようになる形式として見られる(Ono 1992)。しかし、語彙的意味と文法的意味との意味的連続性は、明らかになったとは言えない。このように、本稿では、日本語動詞「仕舞う」の文法化に見られる段階性を明らかにすることを目的にする。本稿の考察を通して、「—しまう」の表すアスペクト的意味は、<終結>→<実現>→<パーフェクト>という流れで順次に拡張されてきたことが観察された。また、語彙的意味<終了>は、文法化の始まりに当たる段階に発生したアスペクト的意味との接点であることが明らかになった。

参考文献：

大堀寿夫(2002). 『認知言語学』. 東京大学出版会, 東京.

大堀寿夫(2005). 「日本語の文法化研究にあたって—概論と理論的課題」. 『日本語の研究』. 1(3), 1-16.

Ono, Tsuyoshi. 1992. The grammaticization of the Japanese verb *oku* and *shimau*. *Cognitive linguistics*, 3.4, 367-390.

Hopper, Paul and Elizabeth Closs Traugott 2003. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hopper, Paul and Elizabeth Closs Traugott 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press. (日野資成訳. 2003. 『文法化』九州大学出版会.)

三宅知弘(2005). 「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」. 『日本語の研究』, 1(3), 61-76.

山梨正明(1995). 『認知文法論』. ひつじ書房, 東京.

梁井久江(2009). 「テシマウ相当形式の意味機能拡張」. 『日本語の研究』 5(1), 15 - 29.

2. 文末が名詞で終わる報告・引用表現

大西美穂 (名古屋大学学術研究員)

新聞の記事では、「だ」やそれに準じる形式を伴わず、名詞で終わる文が多く観察される。

- (1) 東松山署によると、このしょうゆは、江戸時代からの歴史を誇るという老舗「笛木醤油」の製品。(2012-8-9 MSN 産経)
- (2) このほかにも複数のバスの乗客がけがをしている模様。(2012-7-25 読売新聞)

これらのように、名詞が文末に出るという共通点を除けば構文タイプは多様である。本発表はこの現象を「だ」の使用の有無の対立であると考え、「だ」が生じない現象という観点から、名詞で終わる表現および「だ」の機能にせまる。分析は、話者、聞き手、情報源の各特徴別での「だ」類の使用

の点から行う。その結果、情報源を表す「～によると」が作る文脈さえなければ「だ」の生起が自然であること、また、面前の具体的な聞き手への報告という環境では丁寧形「です」が必須となることなどを指摘し、「だ」の多機能性の一端を明らかにする。

参考文献：(1) メイナード・K・泉子 2008. 『マルチジャンル談話論』、東京：くろしお出版。(2) 角田太作 2011. 「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」、『国立国語研究所論集』1: 53-75.

3. 「ナイカ」と「ナイノカ」—日本語否定疑問文におけるノダの語用論的機能

亀山里津子（大阪大学大学院）

日本語の否定疑問文（以下「否疑文」）である「ナイカ」と、それにノダを挿入した「ナイノカ」に注目し、否疑文においてノダがどのような語用論的機能を持つのか検討する。まず、インフォーマントチェックの結果から、「ナイノカ」は肯定極性項目と共起しにくいことを示す。

- (1) a. 昨日街で見かけた気がしますが、誰かと出かけませんでしたか? <ナイカ>
- b. 昨日街で見かけた気がしますが、誰かと出かけなかったですか? <ナイカ>
- c. *昨日街で見かけた気がしますが、誰かと出かけなかったのですか? <ナイノカ>

ここから「ナイノカ」が、否定事実に対する話し手のバイアスを含む傾向が強いと予測する。つまり、(1c)では「ナイノカ」が持つ「出かけなかった」という否定事実に対するバイアスと、「誰か」という肯定極性項目が相反するため非文になると考える。コーパス調査の結果も併せて提示し、「ナイノカ」と否定バイアスの結びつきを主張する。

参考文献：(1)古座暁子. 1989. 「～か、～のか—会話文における場合—」『教育国語』97. 23-33. (2) 田野村忠温. 1988. 「否定疑問文小考」『国語学』152 集. 109-123 (3)野田春美. 1997. 『の（だ）の機能』. 東京. (4)野田春美. 1997. 「～ノカ?、～ノ?、～カ?、～φ?—質問文の文末の形—」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（上）単文編』. 210-219. 東京.

4. 談話における「よね」の機能—対話的用法と共話的用法に注目して

大久保加奈子（京都府立大学大学院）

本発表の目的は、終助詞「よね」の談話における機能を明らかにすることである。「よね」は話し手の認識を提示し、その認識が相手と共有されることを示したり、促したりする際に用いられる形式である。日本語母語話者の自然会話を収録した「立命館大学日本語会話コーパス」の用例を分析したところ、提示された情報が共有可能かを相手に確認する用法と、相手の発話に対する同意や自分の解釈を示して相手に確認する用法が多く見られた。会話には複数の参加者がそれぞれ自分の発話を完結させてから相手の話を聞く「対話」的スタイルのものと、複数の参加者が共同で一つの話を作っていく「共話」的スタイルのものがあるが（水谷 1980）、日常の雑談では、「よね」は共話的なやりとりにおいてより好んで用いられ、相手との共通の話題を探ったり、互いの認識を確認、共有しながら共同でストーリーを構築したりする際に重要な役割を担っていることを主張する。

参考文献：(1) 張恵芳. 2009. 「自然会話における「ヨネ」の意味類型と表現機能」『言語学論叢』28. 17-32. (2) 水谷信子. 1980. 「外国語の修得とコミュニケーション」『言語生活』344. 28-36.

E 会場 [02-03-02] 日本語発表

1. “你说” “我说”

汪 宇（東京福祉大学）

“你说”と“我说”は「あなたが言う」と「私が言う」を意味する他、「あなたが考える」と「私が考える」という派生的な意味、「あなたに注意をしてもらう」と「私の意見を強調する」という談話標識の役割まで担うことがある。いずれも「私」と「あなた」という人称の相違が保たれているが、「私」と「あなた」が対立する立場であるにも関わらず、場合によって、“你说”と“我说”が入れ替えられることが見受けられる。本発表は「語彙」、「文脈」、「会話参加者の立場」、の三つの角度から両者の機能を考察し、入れ替えの可能な理由を説明する。

参考文献：(1) Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge University Press.

- (2) 刘 崧. 2008. “我说”的语义演变及其主观化. 『语文研究』3.18-23. (3) 曹 秀玲. 2010. 从主谓结构到话语标记—“我／你 V”的语法化及相关问题. 『汉语学习』5. 38-50.

2. 不満表明の日中対照研究：性差を中心に

莫 晓雪（名古屋大学大学院）

本研究は、日本語母語話者(JNS)と中国語母語話者(CNS)を対象として、性差を中心に両者の不満表明における特徴を探ることを目的とする。話し手と聞き手の関係を「面識はあるけれども、友人とは呼べない程度の親しさの同学年の人」に統制し、談話完成課題(Discourse Completion Task: DCT)を用い、日本語母語話者と中国語母語話者各 100 人（男性 50 人と女性 50 人）に対して、調査を行った。不満表明の発話を「開始部＋主要部＋終結部」の 3 部分に分け、主要部において、不満度のレベルによって、JNS と CNS の不満表明ストラテジーの選択が異なるかどうかを明らかにする。また、開始部と終結部分において、JNS と CNS の言語形式に見られる特徴を明らかにする。

参考文献：(1) Holmes, Janet (1995) *Women, men and politeness*. New York: Longman. (2) Olshtain, Elite and Liora Weinbach (1987) Complaints: A study of speech act behavior among native and nonnative speakers of Hebrew. In: Jef Verschueren and Marcella Bertucelli-Papi (eds.) *The pragmatic perspective*, 195-208. Amsterdam: John. Benjamins.

3. 「褒め」に対する日本人英語学習者の応答—海外語学研修の前と後の会話を資料として—

山本綾（豊橋技術科学大学）

「褒め」という発話行為がなされると、その受け手は、謙遜（自分自身を称賛しない）と協調（褒め手に異議を唱えない）の兼ね合いを図りながら応答し、さらに可能であれば、褒め→応答の発話連鎖をさりげなく終結に導く。本研究では、日本人英語学習者の語用論的能力の発達過程を検証することを目指し、会話資料に基づいて、まず(1)褒めに対する日本人英語学習者の応答と、(2)褒め→応答連鎖の終結部について調査した。その上で、(3)英語母語話者との接触経験を蓄積すると、どのような変化が生じるのかを探った。その結果、以下の知見を得た。学習者の応答は、(1)ごく短い表現あるいは笑いや沈黙が中心となっており、(2)学習者の側から、褒め→応答連鎖を終結させることは稀である。英語圏での研修に参加した後は、(3)応答の形式には顕著な変化は見られないが、英語母語話者が用いる方略を模倣して、褒め→応答連鎖を終結させるようになる。

参考文献: Pomerantz, A. 1978. “Compliment Responses: Notes on the Co-operation of Multiple Constraints.” In J. Schenkein (ed.) *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, 79-112. New York: Academic

4. ロシア人日本語学習者が依頼に対する「断り」のストラテジーを選択する要因

ブラーエヴァ・マリア（名古屋大学）

本発表では、依頼に対する断りの場面におけるストラテジーの選択を決める諸要因を考察する。具体的には、力関係、社会的距離、負担の度合い、文化と使用言語の差、断りのストラテジーの種類の五つの要因を設定し、断りのストラテジーの選択頻度に及ぼす影響度を示す。その際、ロシア語を学習したことない日本語母語話者と日本語を学習したことのないロシア語母語話者の二つのグループを比較の基準とし、ロシア人日本語学習者のL1とL2における傾向を明らかにする。

参考文献：(1) 清水崇文. 2009. 『中間言語語用論の概論』. スリーエーネットワーク. (2) 林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞. 2011. 「丁寧度判定で測定したポライトネス・ストラテジーの要因に関する決定木分析」. 『日本文化学報』47. 101-115.

招待講演 (13:00~14:40) [A会場 02-B1-02]

Corpora, dictionaries and pragmatics: challenges and opportunities in the age of e-lexicograph”

Professor Michael Rundell (Editor-in-Chief, Macmillan dictionaries)

This paper considers the relationship between corpora, dictionaries, and pragmatics. Prior to the COBUILD project of the 1980s (which gave rise to the first corpus-based description of English vocabulary), English dictionaries had in general paid little attention to pragmatics, beyond the simple labelling of some words and phrases as ‘offensive’, ‘appreciative’, ‘derogatory’, and so on. COBUILD took pragmatics seriously and attempted a more systematic approach, drawing on its corpus data. Although its success was rather limited, pedagogical dictionaries have – in the intervening years – made further contributions to the coverage of pragmatics. We have begun to see a greater focus on connotation and on defining styles geared more towards explaining illocutionary and discourse-organizing function than to describing simple denotation. These newer features will be discussed and evaluated. Yet despite all this progress, it remains true that pragmatics is something of a ‘poor relation’ in learner’s dictionaries. We are now, however, in the middle of a sea change in the world of reference resources, as dictionaries migrate from paper to digital media. The consequences of this for the conventions and methodology of lexicography have been profound, and broadly positive. It can be argued that dictionaries have at last found their ideal medium. Hyperlinking, the absence of space constraints, multimedia, links to corpora or to supplementary content (such as blogs), are all features of the digital medium which may have a part to play. The opportunities which this new paradigm offers are enormous, and are only just beginning to be grasped. I will try to define what the scope of ‘pragmatics’ might be in relation to dictionaries. Then, taking some specific areas as case studies, I will consider how dictionaries might handle them, taking advantage of the wider possibilities provided by digital media.

References

Atkins, B. T. S. and Rundell, M. 2008. *The Oxford Guide to Practical Lexicography*. Oxford: Oxford University Press. 422-427.

Hanks, P. W. 2002. ‘Mapping Meaning onto Use’, in Corr  ard, M.-H. (Ed.) *Lexicography and Natural Language Processing: A Festschrift in Honour of B. T. S. Atkins*. UK: Euralex. 156-198.

Wilson, D. 2003. ‘Relevance and lexical pragmatics’ *Rivista di Linguistica*, 15.2: 273-291.

シンポジウム (14:50~16:50) [A会場 02-B1-02]

テーマ : “Corpus Linguistics and Pragmatics”

Corpus-driven Contextual Processing

Yuji Matsumoto (Nara Institute of Science and Technology)

This talk will overview the current contextual processing research. Especially, I will first talk about anaphora resolution and predicate argument structure analyses. I will then introduce corpus-based relational knowledge extraction, such as textual entailment and causal relation extraction. The talk will be concluded with future direction of contextual processing of natural language text.

コーパスを利用した文脈処理研究

松本裕治 (奈良先端科学技術大学院大学)

大規模コーパスを利用した近年の文脈処理を概観する。具体的には、文内あるいは文を越えた照応表現の解析および関連技術としての述語項構造解析の概要と我々の取り組みについて述べる。また、文間の含意関係同定や因果関係等の関係知識をコーパスから抽出に関する研究を紹介し、今後の文脈処理の方向性について議論する。

Interface of corpus linguistics and pragmatics

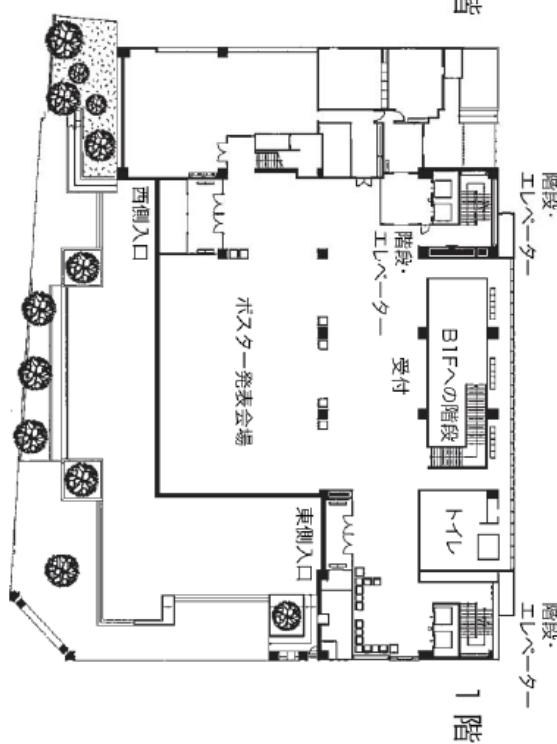
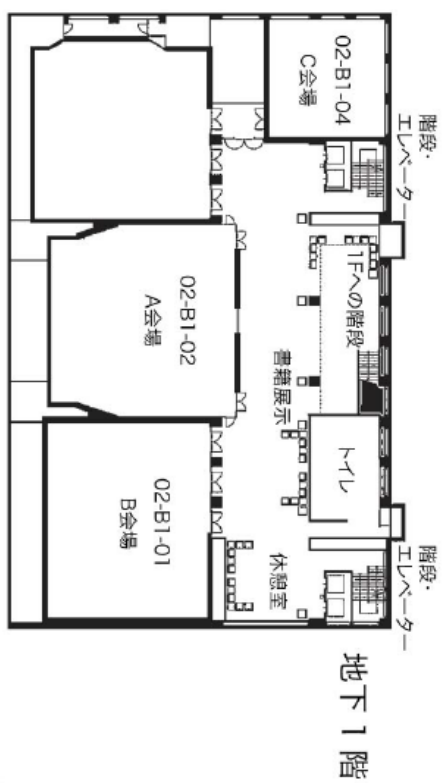
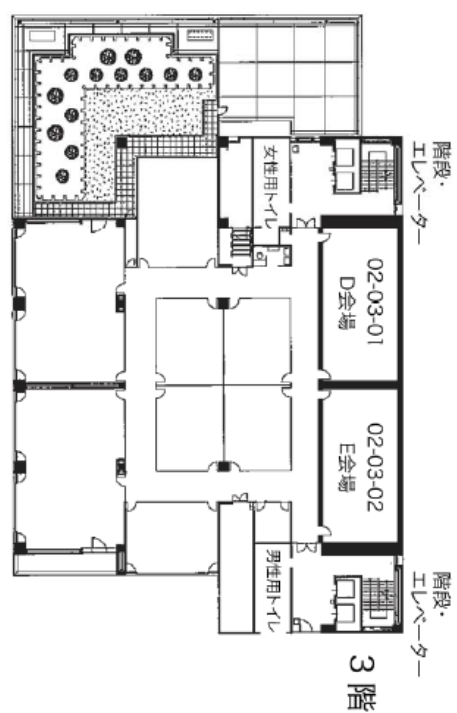
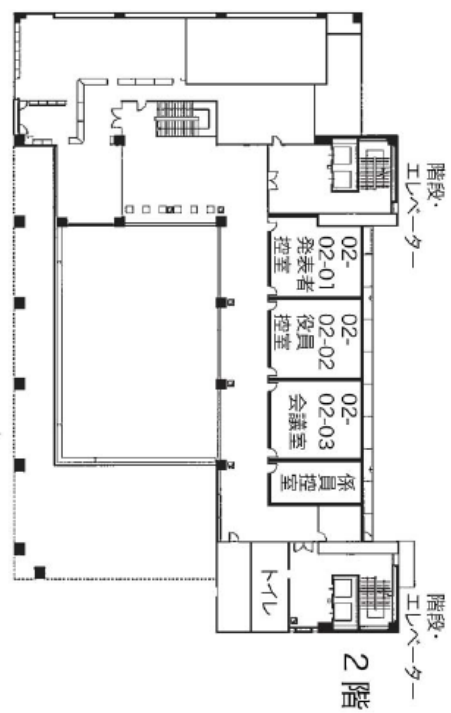
Shin'ichiro Ishikawa (Kobe University)

One of the striking differences between corpus linguistics and pragmatics is that the former usually depends on quantitative analysis, while the latter on qualitative analysis. However, two approaches, both of which pay greater attention to language in use rather than to language in theory, are not necessarily mutually exclusive. Corpus linguistics undoubtedly contributes to sophistication of description of pragmatic dimensions of language in use. In this sense, corpus-based pragmatics or CBP seems a promising field of research. In the current talk, using a balanced corpus of modern Japanese, we attempt to reconsider sentence-final politeness markers of Japanese, which have been traditionally analyzed in the field of pragmatics, as a case study exploring the interface of corpus linguistics and pragmatics.

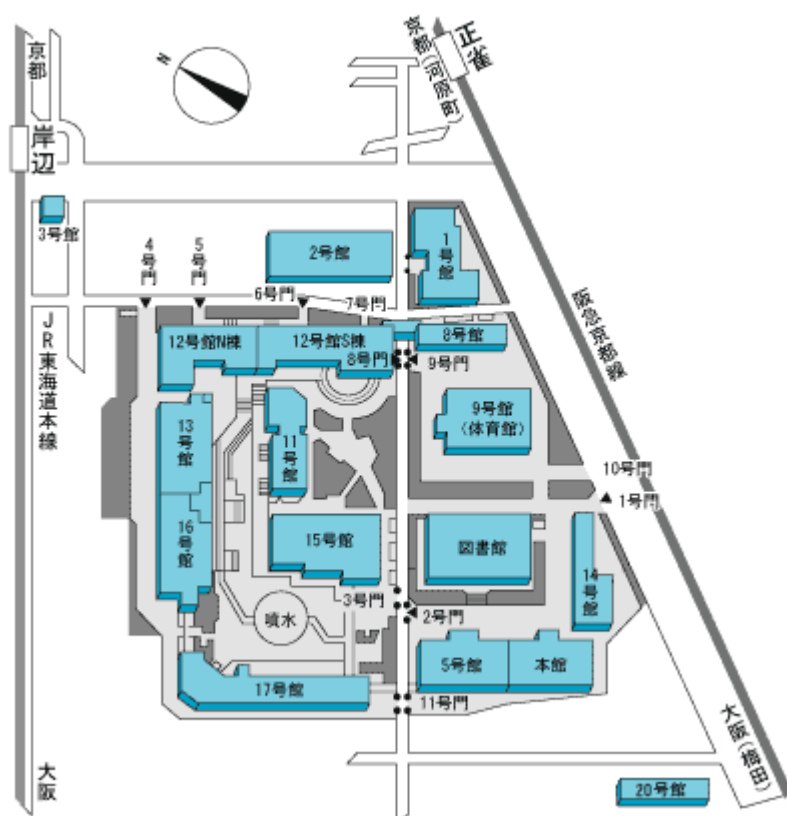
Selected Bibliography

- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bunt, J. (2003). *Oxford Japanese grammar & verbs*. Oxford: Oxford University Press.
- Ishikawa, S. (2008). *Eigo kopasu to gengo kyoiku*. Tokyo: Taishukan Shoten. [English corpus and language education]
- Ishikawa, S., Maeda, T., & Yamasaki, M. (Eds.). (2010). *Gengo kenkyu no tame no tokei nyumon*. Tokyo: Kuroshio Shuppan. [Introduction to statistics for language studies]
- Ishikawa, S. (2012). *Beshikku kopasu gengogaku*. Tokyo: Hitsuji Shobo. [Basics of corpus linguistics]
- Lee, J., Ishikawa, S., & Sunagawa, Y. (2012). *Nihongo kyoiku no tame no kopasu chosa nyumon*. Tokyo: Kuroshio Shuppan. [Introduction to corpus analysis for teaching Japanese]
- Masuoka, T. (1991). *Modaritei no bumpo*. Tokyo: Kuroshio Shuppan. [Grammar of modality]
- Takiura, M. (2008). *Poraitonesu nyumon*. Tokyo: Kenkyusha. [Introduction to politeness]

会場見取り図 2号館



キャンパスマップ



JR 東海道本線「**岸辺駅**」・阪急京都線「**正雀駅**」ともに大学まで徒歩 5 分。



岡本雅史 (立命館大学)

E-mail: psj.secretary@gmail.com